

アリストテレス『形而上学』A（第一）巻第八章～第一〇章 ——訳と注解——

Aristotle's *Metaphysics* A 8-10: Translation and Commentary

坂 下 浩 司

Koji SAKASHITA

凡 例

この翻訳の底本は Primavesi 2012a であり, Ross 1924 および Jaeger 1957 と比較した。邦訳は、『形而上学』については, 全訳2種(岩崎訳, 出訳)を参照した。その他は, 基本的に, アリストテレスは, 京都大学学術出版会の「西洋古典叢書」にあるものはそれを, その他は岩波書店の「新・アリストテレス全集」版を, ソクラテス以前哲学者の「証言」や「断片」は, 同書店の『ソクラテス以前哲学者断片集』を, プラトンは, 前記「叢書」にあるものはそれを, その他は岩波書店の「プラトン全集」を, 上記の哲学者以外の著作家の邦訳は, 「叢書」版を, そこにないなどの場合は岩波文庫版を用いた¹⁾。

第八章

[988b22] ところで, 次のような人たち, すなわち, 世界万有は一つであるとし, また何か一つの自然本性のものを「素材」として立て, しかもこれは物体的で大きさをもつものだとする人たちは, みな, 明らかに多くの点での外している。というのも, [難点 M 一²⁾] 彼らは物体の根本要素だけを立てて, 非物体的なものについてはそういったものを立てないが, 非物体的なものもまた存在するからである。そして, [難点 M 二] 生成と消滅について原因を語ろうと企て, 万物について自然的な説明をしながら, 動の原因となるものを取り去っているのだ。さらに, [難点 M 三] 「根本存在 [本質存在]」つまり「何であるか」をいかなるものの原因としても立てないという点でも的

-
- 1) 謝辞: 原稿を試読していただいた, 大学院生の野村雄一さん, ソクラテス以前の哲学が専門の和田利博さん, アリストテレス学者の濱岡剛さんに感謝いたします。
 - 2) 本章では四者の難点が挙げられていく。それぞれを区別するため漢数字の前にイニシャルを置く(たとえば「一元論者たち」は「Monists」なので彼らの難点は「M 一」とした)。

外れである。[988b29] 以上に加えてまた、[988b30] [難点 M 四] 単純物体のうちのどれかを始原だと | | 「土」は除くが | | 安易に語り、どのようにそれらが互いから生成するかは考察していない点でも的を外している。なお私がここで語っているのは、「火」と「水」と「土」と「空気」のことだ³⁾。というのは、単純物体は一方では結合によって、他方では分離によって、互いから生成するのだが、このことは、「どれがどれより先のものであり後のものであるか」ということに対して、非常に大きな違いをもたらすから。[988b34] なぜなら、或る意味で「万物の根本要素」という性格が最もあると考えられるはずのものは、[989a1] 結合によってそこからものが生成するところの「第一のもの」だからであって、そのようなものは最も小さな部分からなる最も微細な物体であろう。

(まさにそれゆえ、「火」を始原として立てる人たちは、以上の議論にとりわけ同調的な仕方でも語ることだろう。しかし他の人たちも各々が、物体の根本要素はそのようなものであることに同意している。[989a5] それで少なくとも後者の人のうち、しかも「一つのもの」を語る人のうち、誰も「土」が根本要素であるという主張はしなかったが、明らかにその理由は「土」が大きな部分からなることにある。だが、残る三つの根本要素各々は、誰かが支持者になった。すなわち、或る人たちは「火」が、別の人たちは「水」が、また別の人たちは「空気」が根本要素であると主張している。それにもかかわらず、いったい何ゆえに彼らは多くの人々のように「土」もそれであると語らないのであろうか。実際、人々は、万物が [989a10] 「土」であると語っているし、ヘシオドスも「土」が様々な物体のうち最初のものとして生じたと主張しているからだ⁴⁾。このように、その考えは古くからあるもので人気があったのだ。)

それで、先の議論にしたがえば、もし誰かが [根本要素を] これらのうち「火」以外の何かだと語っても、またもし誰かがそれを「空気よりは濃密だが水よりは希薄なもの」だと想定しても、その人は正しく語っていないことになるだろう。しかしもし「生成の点で後のもの」は「自然本性の点では先のもの」であり⁵⁾、また「熱で加工され結合されたもの」は「生成の点で後のもの」だとすれば、以上とは反対のことになる⁶⁾、すなわち、一方では「水」が「空気」よりも、他方では「土」が「水」よりも「先のもの」であることになるだろう⁷⁾。

[989a18] さて、私たちによって語られた種類の原因⁸⁾を一つだけ立てた人たちについては、こ

3) 先に、始原とされてきた単純物体から「土」は除かれたのであったが、ここで「彼らが考察していない」とされている「単純物体の相互からの生成」の場合には「土」は除外されず、通常通り四つ考えるのだと付言したわけである。

4) 本巻第四章冒頭九八四 b 二七 | 二九でのヘシオドス『神統記』からの引用では「あらゆるものの中で一番初めに生じたのはカオス しかし次には／胸広きガイア……」となっており、「土」にあたる「ガイア」は文字通りには「最初のもの」ではない。この問題に対しては、「カオス」とは「ぼっかりと口を開いた空隙」のことであり、したがって四つの構成要素のどれにも対応させられないからここでの考察からは除かれて、その結果ガイアは「最初のもの」となると考えることができる。

5) 目的論的な観点では、最後に実現するものが、その実現過程を最初から自然本性的に支配していたものであることになるから。

6) この文と前文とで、「生成の点で後のもの」を中項とした三段論法が形成され、「熱で加工され [濃縮され] 結合されたもの [水や土] は、自然本性の点では先のものである」という結論が導かれる。

7) それなのに「根本要素は一つだ」とした人たちのうちに「土」がそれだとした人たちが出なかったのは不思議だ(いてもよさそうなのに)ということ。

8) 「素材」因のこと。

れらでよしとしよう。しかし、[989a20] たとえばエンペドクレスが「素材」は四つの物体だと主張したように、そういった原因を一つより多く立てる人が誰かいたとしても同じことだ。すなわち、必然的にこの人にも同じ難点が生じる⁹⁾一方で、特有の難点も生じるから。なぜなら、[難点 E 一] 私たちは「それら四つの物体が」互いから生じるのを見ているが、その様子が暗示しているのは、同一の物体が常に「火」や「土」としてとどまるわけではないということだ（これらのことについては自然についての諸論考で述べられた¹⁰⁾）。また、[難点 E 二] 動かすものがもつ原因 [= 始動因] について、それを一つ立てるべきなのか二つ立てるべきなのかも、まったくもって、正しい仕方でも理屈にかなった仕方でも語られていなかったと考えられるべきである。そして総じて¹¹⁾、[難点 E 三] そのように語る人たちにとっては、性質変化も消去されるのが必然である。[彼らの立場では] 熱いものから冷たいものが出来ず、また冷たいものから熱いものが出来ないことになるからだ。すなわち、まさにそれら反対性質を受け入れる何かがあるはずであり、つまり「火」や「水」になる何か一つの自然本性のものがあるはずなのだが、[989a30] これをあの人 [エンペドクレス] は否定するからである。

また、アナクサゴラスに関しては、二つの根本要素¹²⁾を語っていると想定したなら、彼の言葉に最もかなった想定をしたことになるだろう。それは、あの人 [アナクサゴラス] 自身が「明瞭な仕方」で表現したものではない¹³⁾。にもかかわらず、これを語る人たちに必ずや彼が同意するはずなのである¹⁴⁾。実際、「初めに万物は混合されてしまっていた¹⁵⁾」などと主張することは、他にも様々な理由で馬鹿げているのだが、とりわけ次のような理由で馬鹿げている。すなわち、[989b1] [難点 A 一] [万物がその「初め」に] 先立って混合されずに存在していなければならないことになる¹⁶⁾という理由でも、また [難点 A 二] 任意のものが任意のものに混合されることは自然本性上ないという理由でも¹⁷⁾、そしてこれらに加えて、[難点 A 三] [アナクサゴラスの立場では] 「こうむる状態」や「たまたまいっしょにあるだけの状態」が「根本存在」から分離されうることになってしまう（混合することができるなら分離することもまたできるから¹⁸⁾）という理由でも¹⁹⁾。

9) 通常、上記の難点 M 一と M 三のことだと解されている。

10) 『天について』第三巻第六章三〇四 b 二三 | 三〇五 a 一四のことであろう。

11) 「そして総じて」以下 a 二七から三〇「かの人 [エンペドクレス] はこれを否定するからである」までは [E 一] についての欄外の書き込みであり、もとの文脈には合っていない部分だとされている。

12) おそらく「知性」と「種子」のこと。

13) アリストテレスが先行愛知者たちを評する際に用いる表現の一つ（『Met.A.4 補注 a』を見よ）。本巻第五章 九八六 b 五 | 六でも登場していた。

14) この発言は、アリストテレスの歴史解釈方法論として重要である。

15) 「初め」の状態を記述する動詞「混合される」が現在完了形になっている。このことの含意とその問題については、『Met.A.8 補注 九八九 a 三四の「混合されてしまっていた」について』を見よ。

16) 「初め」が初めではなくという不合理に陥る。

17) アナクサゴラスの「混合」は現在では、混合されるものの質とは関係のない「機械的」なものだと解されているが、アリストテレスのここでの議論では、それらの質が「混合」の仕方に関係する言わば「化学的」な混合だと前提されている。彼の「混合」論について詳しくは、『生成と消滅について』第一巻第一〇章を参照。

18) 直訳は「同一のものに『混合（ミークシス）』と『分離（コーリモス）』が属すから」であるが、ポイントをはっきりさせるために諸訳にしたがい意識した。

19) この「難点 A 三」は、アナクサゴラス思想の内部にある不整合の指摘ではなく、アリストテレス自身の存在論

[989b4] しかしそれにもかかわらず、もし、彼の語ろうと望んでいることごとをつなぎ合わせ[再構成して] それにしたがうならば²⁰⁾、おそらく彼の語っていることは[本当は] もっと新味のある²¹⁾ ことなのだと分かるだろう²²⁾。[989b6] なぜなら、何も分離していなかったときには、明らかにあの根本存在について何事をも真のこととして述べるができなかったはずだからだ²³⁾。ここで私が言っているのは、たとえばそれは、白色でも黒色でも[それらの中間の] 灰色でも他のいかなる色でもなくて、必然的に無色のものであったことになるはずだということである。というのは、さもなければ、[989b10] それらの色のうちの何かを[あの根本存在は] もっていただろうから。そして同様に、この同じ論法によって無味のものにもなり、他にもそういった性質を何ももたないことになる。なぜなら、それは、或る性質のものでも、或る量のものでも、「何か？」と問われるもの[根本存在] でもありえないから。[989b12] すなわち、[仮にありうるとしたなら] それら特定の²⁴⁾ 種類のものどれかがそれに属すはずだから。しかし少なくとも「[初めに] 万物は混合されてしまっていた」以上²⁵⁾、そんなことは不可能だ。というのも、それらはすでに分離してしまっていたはずなのだが²⁶⁾、彼[アナクサゴラス] が主張するところでは、「[初めに] 万物は混合されてしまっていた」のだから。ただし、「知性」は別で、これだけは混合されず清浄であったということである²⁷⁾。[989b16] さてそれで、以上の考察に基づけば、彼は[本来] 次のように言うべきだったろう。すなわち、始原は、(単純で混合されないものだから)「一」であり、また「他」でもある。[「他」とは] たとえば、限定される前のものとして、すなわち何らかのアイデアを分有する前のものとして、私たちが²⁸⁾「不定なもの」を立てるようなものだ。したがって、彼[アナクサゴラス]

に基づく批判になっており、研究者たちからしばしば「時代錯誤的(anachronistic)」だと非難されてきたものである。たとえば、アリストテレスは、自分の存在論の枠組みで、アナクサゴラスの「原初の完全な混合体」を「根本存在」として述語付けの対象とみなしている。

- 20) 先行愛知者への態度の取り方に注意されたい(註一三も参照)。なお、細かくていねいに訳せば、「彼の語ろうと望んでいることごと」[ばらばらに語られている様々な潜在的に興味深い着想]をつなぎ合わせて(シュニー)徹底的に(一ディー)分節化し(一アルトゥローン)[明快な構造をあたえて]それにしたがうなら」となる。
- 21) この比較級は、アナクサゴラスの考えを他のいわゆるソクラテス以前哲学者の考えと比較してのものではなく、アリストテレスによって整理され表現し直されたバージョンのアナクサゴラスの考えは、アナクサゴラス自身の手になるバージョンのアナクサゴラスの考えよりも、つまり、アナクサゴラスの考えは、本当は「もっと新味のある」ものだということ。
- 22) この発言もアリストテレスの歴史解釈方法論として重要。「語ろうと望んでいる」という表現は、後の九八九b一九で再登場する。
- 23) この理由文がどのように前文の理由として機能しているのか理解が難しい。アナクサゴラス批判をしているようにも見えるからである。この段落の始めの接続詞「しかしそれにもかかわらず(ホモース)」(九八九b四)以降は批判よりむしろ賞賛の方に力点があり、「新味のある」が褒め言葉で、最新の考えがプラトンの思想だとすると、アナクサゴラスの「原初の万物混合状態」が、プラトン主義における「不定の二」のように、あらゆる限定を受ける以前の不定な何かだということが評価できるということかもしれない(Primavesi 2012, 245-246による)。
- 24) 直訳すれば「部分において語られる」だが、意識した。
- 25) 先に九八九a三四で登場していた言葉。
- 26) もし何か別の何かに属すのだとしたら。
- 27) アナクサゴラス「断片」一二(DK)参照。
- 28) プラトンの弟子としての「私たち」だというコメントがよく付されている箇所。

が現に語っている仕方は正しくもないし明晰でもない。それにもかかわらず、[989b20] 彼が語ろうと望んでいるのは、彼よりも後の人たちが語っており今はもっと明らかなことに近い〔新味のある〕何かなのである²⁹⁾。

[989b21] しかし実際のところ、これらの人たちは、たまたま、生成消滅や動についての言説に親しんでいるにすぎない。(というのは、彼らはほとんど、そのような「素材」をもち生成消滅や動に関わる〕根本存在について始原とか原因とかを探究しているだけだから。) [989b24] 他方で、あらゆる存在について見極めて、諸存在には「感覚されるもの」もあれば「感覚されないもの」もあるとする人たちが、それら両方の種類の存在を吟味しているのは明白である。[989b27]であれば、なおさら、後者の人たちについて、いったい彼らは、今私たちの前に置かれている問題との関係で、何を見事に語りあるいはまた見事には語っていないのか、吟味することに時を費やすべきだろう。

[989b29] それで、いわゆるピュタゴラス学派の人たちは、自然を論じる人たちよりも奇異な仕方方で [989b30] 始原や根本要素を使っている。その理由は、彼らピュタゴラス学派の人たちが、これらを「感覚されるもの」から取ってこなかった³⁰⁾ことによる。(実際、数学的なものは、天文学に関わるものは別にして³¹⁾、動のない存在に属しているから。) それにもかかわらず、彼らが議論し研究しているのは、万事、自然に関わることなのである。実際、彼らは、天を生成させ、[990a1] その部分や状態やはたらきについて起こっていることを観察し、始原や原因を全部、それら〔の説明〕だけに使っているからだ。このことは、彼らが、存在するものとは「感覚されるもの」のことであって、それはいわゆる「天」が取り囲んでいるもの〔自然物〕だけだとする点で、自然を論じる他の人たちと一致していることを意味する。[990a5] だが、彼らはその原因や始原を、私たちが述べたように³²⁾、いっそう高度な存在へ上昇していくのにも十分なものとして、また、自然についての説明よりもこれに適したものとして語っている。

[990a8] しかしながら、〔数学的性質である〕「限定と無限定」や「奇数と偶数」³³⁾だけを基礎に置くならば、いったいどのような仕方方で動が存在するようになるのか、彼らは何も [990a10] 語っておらず、あるいは、動や性質変化なしに、生成や消滅が、そして「天を渡って運行するもの」のはたらきが、いかにして存在しうるのかも、彼らは何も語っていないのだ。

[990a12] さらに、仮にそれら〔上述の数学的性質〕から「〔物体的な〕大きさ」が出来ているのだと誰かが彼らに認めたとしても、またそのことが証明されたのだとしても、それにもかかわらず、いったいどのような仕方方で、或る物体は軽さを、他の物体は重さをもつことになるのだろうか³⁴⁾。というのは、彼らが想定したり語ったりしていることに基づけば、彼らは、数学的な物体について、感覚される物体についてより以上に語っているわけではないからだ。それゆえ、火や土やそのよう

29) この言葉も、アリストテレスの歴史解釈方法論として重要。発言自体と、その解釈（「似ている何か」を語ろうと「望んでいる」）も分けられている点に注意。

30) つまり、「これら〔始原や根本要素〕を『感覚されないもの〔高度なもの〕』から取ってきた」ということ。

31) 「動のない存在」を扱う数学の一種とされる天文学が研究対象とする星々は、「動のない存在」ではなく場所運動をしているということ。天文学は、『自然学』第二巻第二章一九四a七―一二において、光学や音階論と共に、「数学的諸学のうちでも比較的自然学的なもの」という、学問分類上、特徴のある性格付けがなされている。

32) 本章九八九b三―三三で「彼らピュタゴラス学派の人たちが、これらを『感覚されるもの』から取ってこなかった」と言われていたのを指している。

33) 本巻第五章九八六a二二以下の「対になった系列」の最初の二対。

34) 「軽い」や「重さをもつ」は、自然物の典型的な性質として取り上げられている。

なたぐいの他の物体については、いかなることであれ何も彼らは語らなかったのだが、それは、私の思うところでは、「感覚されるもの」について固有なことを何も彼らが語っていないからなのである³⁵⁾。

[990a18] さらにまた、一方で数の「こうむる状態」やその数[そのもの]は、[990a20]「始まりも今も天に存在した生じるもの」の原因であるということなのだが、他方で宇宙[天³⁶⁾]がそれから出来ているところの³⁷⁾その数とならぶ³⁸⁾別の数は存在しないということ、どのように受け取るべきなのだろうか。[990a22] というのは、彼らにとっては[天/宇宙]特定の部分に[数の「こうむる状態」であるところの][990a23]「意見³⁹⁾」と「時機⁴⁰⁾」があり、その少し上か下に⁴¹⁾「不正⁴²⁾」と「分離⁴³⁾」あるいは「混合⁴⁴⁾」があつて⁴⁵⁾、以上のことの証明として彼らは「それらの各々が一つの数なのだ」と語るが、[990a27] [数の]「こうむる状態」がそれぞれの場所に結びついてはいるがゆえに、その場所にはすでに、[数から]複合された多くの「[物的な] 大きさ」があることになる。[990a28] その場合、それら[「意見」や「時機」など]の各々が対応すると[私たちが]受け取るべきその「数」とは、「天にある数」と同じ数なのだろうか、それとも、これとならぶ⁴⁶⁾別な数なのだろうか。[990a29] 実際、プラトンは、別なものだと主張するからだ。もちろん、あの人でさえ、それらも、それらの原因も、ともに数だと思つてはいる。とはいえ、「思考される数」が原因であつて、他の数は「感覚される数」だ、としているのだ。

35) 前文では「感覚される物体についてより以上に語っているわけではない」と言われていた。ということは、感覚される物体についてなにかしか語っていたわけである（あるいはその可能性がある）。しかし、この文で「物体については、いかなることであれ何も彼らは語らなかった」と言われており、しかも前文とこの文が「それゆえ」という接続詞で結ばれている。この「パラドクス」に研究者は悩んできた。Primavesi 2012, 259-260 の提案によれば、前文では、ピュタゴラス学派の人たちの主要な「考察対象」が自然物だと語られる一方、この文では、彼らは自分たちの考察対象である自然物が適切に（固有）な仕方でも考察されうる「ツール」をもたなかったとされているだけなので矛盾はないことになる。

36) ここで「天」と「宇宙」とは同じものを指していないと議論が成り立たない。

37) 「それから出来ているところの」という言葉は「素材」を暗示し、数行前の「こうむる状態」と合わせて、数を「素材」として捉えていた本巻第五章を強く想起させる。特に九八六 a 一五以下を見よ。

38) ここで「ならぶ」と訳した前置詞「パラ」について註四六を見よ。

39) 「三」または「二」に相当。

40) 「七」に相当。

41) 「上」とは世界の中心から遠ざかる方向、「下」とはその中心へ近づく方向のこと。

42) どの数に相当するか不明。

43) ここで「分離」と訳した「クリーシス」を、「決断/判定/判決」などとする訳もある。しかし、「あるいは『混合』」と続くことを考えると、「分離」の方がいいと思われる。ただしこの場合どんな数になるのか不明である。あるいは（ヒッポクラテス的な）「分利」の場合、或る証言によれば、ピュタゴラス学派の人たちは病気の「分利」が奇数日目（三日目など）に起こると考えていたので、この場合は奇数と考えられていたことがうかがえる。

44) 「五」に相当（偶数と奇数の最初の「混合」なので）。

45) 本巻第五章九八五 b 三〇以下を参照。

46) プラトンが論じられる際に（ここで「ならぶ」と訳した）前置詞「パラ」のもつニュアンスについて詳しくは、本巻第六章九八七 b 八と「Met.A 6 補注 b」を見よ。

第九章（前半）

[990a33] それでピュタゴラス学派の人たちについては、今は置いておこう（彼らには、これだけ触れておけば十分であるから）。他方で⁴⁷⁾、アイデアを⁴⁸⁾ [990b1] 立てる人たちは、第一に、[一⁴⁹⁾] 「こちら」に存在する事物⁵⁰⁾の原因を懸命につかもうと探し求め、[一 a] これらの事物と同じ数だけ別のもの [アイデア] を導入したが⁵¹⁾、これはちょうど誰かが何かを数えようとはしたものの、[数えるための手段が] 少ないから数えられないと思い、[それを] もっと多くした上で数えようとするのに似ていた⁵²⁾。実際、アイデアは、彼らが原因を懸命に探し求め「こちら」のもの⁵³⁾から「あちら⁵⁴⁾」のものへ進んだそもそもの出発点にあるもの [[こちら] に存在するもの] と、ほとんど同じ（あるいは [990b5] 少なくはない）数だけあるから。[990b6] [一 b] つまり、その各々には同名の⁵⁵⁾何か [アイデア] が対応している。またそれは、根本存在とならんで、これとは別のものに、「多の上の一」として、属するし、そして「こちら」のものの場合と永遠なもの⁵⁶⁾の場合にもあるからだ。

[990b8] さらにまた、「アイデアは存在する」ということを私たちが示す⁵⁷⁾際に依拠する方式は様々あるが、それらのどれによっても、このことは明らかにされない。というのは、[二] 或る方式に基づいても、[990b10] それを示す推論の成立は必然ではないし、別の方式に基づいても、私たちが「それらにアイデアなどない」と思っている事物⁵⁸⁾にさえアイデアが存在することになってしまうからだ。すなわち、[990b12] [二 a] 「知識 [の存在]」に基づく議論によれば、そのものの「知識」が存在するどんなものにも [それぞれに対応した] アイデアが [990b13] あることになり、そして、[二 b]

47) ここから本章末の九九一b九まで、本書 M（第一三）巻に並行箇所がある（第四章一〇七八b三四 | 一〇七九b三、および第五章一〇七九b一二 | 一〇八〇a八）。

48) この箇所の訳語「アイデア」は、本巻第六章の大部分の場合のような原語「エイドス」ではなく「イデアー」そのものが用いられている。本章でのその使用例は、一回しかなかった第六章とは異なり、かなり多い。

49) 本章におけるプラトンないしアカデメイアの同僚のアイデア論がもつとされる難点を三二個に分け、さらに「一 a」「一 b」の下位区分を設けるのは、Reeve にならったもの。

50) 「こちら」は指示代名詞「トデ（直訳は「これ」）」の意識。この箇所では通常、「感覚されるこちらの世界に属する」という意味に解される。

51) 詳しくは、「Met.A.9 前半補注 九九〇b二の『同じ数だけ導入』について」を見よ。

52) 数えられる「事物」よりも数えるのに使う「数」の方が少なかったら「数えること」自体が成立しないと心配になり、もっと「数」を多く（少なくとも同数になるように）して数えようとしたようなものなのである、ということ。

53) 直訳は「これら」だが、次の「『あちら』のもの」との対比で、「『こちら』のもの」と意識した。

54) 「あちら」は、指示代名詞「エケイノン（直訳は「あれ」）」の意識。通常、「感覚されないアイデアの世界に属する」という意味に解される。九九〇b一の「こちら（トデ）」と対になっている。

55) 原語は「ホモーニュモン」で、本章では後の九九一a六にも登場（後者は文脈上「同名異義の」と訳している）。本書第六章九八七b一〇の「同名の」（こちらは「シュノーニュマ」の訳）も参照。

56) 感覚はされるが永遠な自然物である「天体」だという解釈（Ross）と、感覚されない永遠な存在たる「アイデア」だとする解釈（Cherniss）とがある。

57) アリストテレスがプラトンの学園アカデメイアの一員として「私たちが示す」と語っているとされる箇所。前章九八三b一八の註を参照。

58) 悪いもの、醜いもの、劣ったもの、汚いものなど。

「多の上の一」の議論によれば、「～でないもの」と否定的に言われるものにもアイデアがあることになるし、また、[二c]「何かが消滅した後にそれを思考する場合」の議論によれば、[思考される以上は]消滅するものにもアイデアがあることになる。実際、それにも何らかの表象内容があるのだから⁵⁹⁾。

[990b15] なおまた、様々な議論のうちには、[三] このうえもなく厳密なものもあって、[三a] 或る議論は「関係」のアイデアを立てるが、これ [関係] の「類」がそれ自体で存在することを私たちは否定しており、[三b] また別の議論は「第三の人間」を語るものである⁶⁰⁾。[四] また総じて、アイデアに関する議論は、それを語る私たちがアイデアの存在以上にその存在を望んでいることをだいなしにしてしまう。[990b19] なぜなら [それらの議論からは]、[990b20] 「[不定の] 二」が「第一のもの」ではなく⁶¹⁾、数がそれだということ、「関係」が「それ自体であるもの」よりも [先のもの] だということ、また、或る人たちがアイデアに関する見解にしたがった結果はどれも [彼らの奉じる] 原理に反することになってしまうからである。

[990b22] さらにまた、[五a] アイデアの存在を私たちが主張する根拠となっている想定によれば、本質存在（ウーシアー⁶²⁾）だけではなく多くの別のものにもアイデアは存在することになる⁶³⁾。（というのも、本質存在（ウーシアー）だけではなく他のものについても「思考されるもの」が [それぞれ] 一つあり、また、本質存在（ウーシアー⁶⁴⁾）だけではなく別のものにも「知識」はあって、このようなことは他にも数限りなく帰結するから⁶⁵⁾。）

[[T1] [990b27] 他方で、[五b] [b28] [事柄のうえでの] 必然と、アイデアについての様々な考えによれば、[T1 仮定] もし [b29] アイデアが「分有されるもの（メテクトン）」であるならば、[T1 帰結] 「ウーシアー」のアイデアしかないのが必然である。[T2] [b30] [T1の理由] なぜなら、[アイデアは何かによって] 「付随的に（カタ・シュンベベーコス）」に分有されるのではなくて、[何か] [b31] それぞれ [のアイデア] を次の仕方でも分有する、すなわち、「基礎に置かれるもの（ヒュポケイメノン）」について言われない⁶⁶⁾という仕方でも分有するからである⁶⁷⁾。[T3] [T2の例示] | | 私

59) 一般に、思考は表象内容を前提とするのだが、消滅したものであっても、記憶があれば思考可能である。記憶とは、「表象内容」がその消滅したものの像として把握され持続的に保持されている状態だからである。詳しくは、「Met. A.1 補注c 表象と記憶について」を見よ。

60) 通称「第三人間論」。「人間」という名称が適用される者たちの集合に「人間のアイデア」が一つ存在するとして、この「人間のアイデア」（「第二の人間」）にも「人間」という名称が適用されるとした場合、このアイデアは、先の集合と新たに一まとめにされる。すると、この新しい集合にも再び「人間のアイデア」（「第三の人間」）が存在することになって、この手続きに際限はないので、「人間のアイデア」が無数に存在することにならないだろうか、という議論。

61) 後の議論九九一b 三一 | 九九二 a 一を参照。

62) ここで基本的に「ウーシアー」を「本質存在」と理解する理由は、以下の「付随的に（カタ・シュンベベーコス）」の議論との関係があるからであり、またΔ巻第七章の「自体的存在」論との親近性もあるからである。

63) このこと自体は、アカデメイアと同僚たちも認めるはずの正統なプラトン主義の見解である。

64) ここは単数形で、先の二箇所は複数形になっている。

65) わずか三行中に三回も「ウーシアー」が現れており、「ウーシアー」の論点の強調があるようである。

66) アリストテレスが『形而上学』で「ウーシアー」の特徴として使う言いまわし。『カテゴリー論』では「ヒュポケイメノンのなかにあらぬ」という言いまわしを使っていた。

67) 動詞の「分有」が、「アイデア」を主語とする受動相の「分有される」から、「何か」を主語とする能動相の「分

が言っているのは、[b32] たとえば、[T3の仮定]『何か(テイ)』が『二倍のものの自体(アウトディプレーション)』を分有するなら、[T3の帰結]『それ(トゥート)』は『永遠なもの(アイディオ)』をも分有するが、[b33] しかし『付随的に(カタ・シュンベベーコス)』にである。[T4(T3の理由)]つまり、『二倍のものの(ディプレーション)』に、[b34]『永遠であること』が『付随する(シュンベベーケ)』のだ。――したがって、アイデアがウーシア(本質存在)であることになるというわけである。

[990b34] [六] しかし、「こちら[感覚される個物の世界]」で [991a1] ウーシア(本質存在)を指し示すその同じもの[アイデア]が「あちら[思考されるアイデアの世界]」でもウーシア(本質存在)を指し示している。そうでなければ、「それら[感覚される個物]とならぶ何かが存在する」つまり『『多の上の一』が存在する』という主張はいったい何であることになるのか⁶⁸⁾。[991a2] すなわち [六a] もし一方で、アイデアと「それを分有するもの」とに同一のアイデアがあるとすれば、[両者に] 共通な何かがあることになろう。(というのは、「諸々の消滅する『二』」と「多くのしかし永遠の『二』」の場合で「二」は一つの同じものなのだが、なぜこのことが、「二それ自体」と特定の「二」の場合よりもいっそう成り立つというのだろうか⁶⁹⁾。)[991a5] しかし、[六b] もし他方で、[アイデアと「それを分有するもの」とに] 同一のアイデアがないとすれば、それらは同名異義的なものであることになろう。つまり、ちょうど誰かがカリアスも「人」と呼ぶし、彼の本像も「人」と呼ぶとして、[991a8] それらの間に何も共通性を見ない場合と同様なのである⁷⁰⁾。

[991a8] だが、[七] 人がとりわけ⁷¹⁾ 次のことで行き詰まるはずである。すなわち、[991a10] いったいぜんたいアイデアは、「感覚されるもの」に(「感覚される永遠なもの⁷²⁾」に対してであれ「生成消滅するもの」に対してであれ) 何の寄与をしているのか。なぜなら、[七a⁷³⁾(七)] これらにとってアイデアは、動の原因、またいかなる性質変化の原因となるものでもないからだ⁷⁴⁾。[991a12] だがまた、[七b(八)] アイデア以外の様々なものの知識に対して何の助けにもならない。(なぜなら、

有する)に変化しており、分有される側のアイデアから、分有する側の「何か」へ視点が移動している。次の文以下も、「分有する」という能動相。

68) 無意味な主張になってしまうだろう、ということ。

69) 少し分かりにくい、「同じくらいに成り立つはずだ」ということ。つまり、存在のグレードは異なるが両者ともアイデアではなく、消滅可能で個別的な「二」と永遠の(数学的な)「二」との間に同一の(共通な)アイデア「二」があつていいのなら、(永遠な)アイデア「二それ自体」と特定の(消滅する・個別的な)「二」の間にも同じくらい共通のアイデアがあつてもよくはないか、ということ。「感覚されるもの」とアイデアの中間的存在としての「数学的なもの」については、本書第六章九八七b一四以下を見よ。

70) 「木製の『手』が手であることは、同名異義的である場合を除けば不可能である。……[中略]……それ自身のはたらきを果たすことができないから」(『動物部分論』第一巻第一章六四〇b三六以下)と同じ考え方。

71) アイデア論に関して本章で列挙されている数々の行き詰まりのうちで最も重要だとアリストテレスが感じているのは、「七」であることが分かる。

72) 感覚される永遠なもの、すなわち天体。

73) Reeveは「難点七」に下位区分を設けていない。その結果、「七b」からしばらくReeveの番号とのズレが生じることになってしまった。対処として、丸カッコ内にReeveの番号を示した。

74) 本巻第七章九八八b一―四では、「感覚されるもの」の動はそもそもアイデアの説明対象ではないことが確認されていた。であるから、ここでこのようなことが述べられるのは実は奇妙である。第七章での自分の言葉をど忘れしたのでなければ、動や変化の可能性が、「感覚されるもの」にとってまさしくその自然本性の核心的をなす部分であるがゆえに、あえてアイデア論の弱さを強調する気になった(Frede, 287)。

あれら〔アイデア〕は、これらのものの本質存在でもないから。というのは、〔もし本質存在であったならば〕これらの中に存在していたはずであるから⁷⁵⁾。また、〔七c（九）〕〔「感覚される何かがあるその当のもの」である〕ということに対しても、少なくとも、アイデアを分有するものに内属しないのであるからには何の助けにもならない。実際、仮にそのようであった〔内属していた〕としても、おそらくアイデアが「原因」だと思われるのは、〔「白いものが」白いもの〔である〕〕のが、〔「アイデアの」白〕が「混合されてしまっていた⁷⁶⁾〕からだという意味であろうから。〔991a16〕しかしこの議論は、最初にアナクサゴラスが、後にエウドクソス⁷⁷⁾やその他の人たち⁷⁸⁾が語ったものなのであるが、容易にくつがえされる。（以上のような見解に関してなら、数多くの「そんなことはありえない」ということを、苦もなく集めてくることができるから。）

〔991a19〕〔八（一〇）〕かといってまた、アイデアにその他のもの〔感覚されるもの〕が「基づく⁷⁹⁾〕と言われることは、〔991a20〕通常の語られ方のどれによっても不可能だ。そして、〔九〕アイデアが「範型」であるとか、それを他のものが「分有する」とか語ることは、中身のない言葉を語ることであり、つまりは詩的な「たとえ」を語ることなのである。〔九a〕というのも、「アイデアに注目しながら製作する者」とは何であるのか⁸⁰⁾。また、〔九b〕何であれ似たものが存在したり生じたりすることは、あのもの〔アイデア〕に似せられるということがなくてもありうるのであり、〔991a25〕したがって、〔範型としての〕ソクラテスが存在しても存在しなくても⁸¹⁾、ソクラテスそっくりな人は存在することだろう。同様にまた、たとえもしそのソクラテスが永遠なものだったとしても、事情の変わらないことは明らかだ。〔九c（一一）〕また、同じものの「範型」が多くあることになり、したがってアイデアも多くあることになる。たとえば、「動物」と「二足的」が、同時にまた「人間それ自体」も、人間のアイデアになる。〔991a29〕〔九d（一二）〕さらに、様々なアイデアは、「感覚されるもの」にとってだけではなく、アイデア自身にとっても「範型」になるし⁸²⁾、たとえば類はもろもろの種の類として「範型」になる。したがって、同じものが「範型」であり且つ〔991b〕「写し」になる⁸³⁾。

75) プラトンの『パルメニデス』一三一A | Eや『ピレポス』一五B | Cに似た箇所がある。もちろんアイデアは「感覚されるもの」の「中に存在」したりはしないはずである。ここには、「感覚されるものの中に存在できないならば本質存在ではない」というアリストテレス自身の想定が隠されている。このことは、彼がアイデアは感覚対象に内在するという主張を展開したかったことを暗示している。

76) 前章九八九a三〇以下でアナクサゴラス（本章でも以下ですぐに彼の名が挙げられる）が批判されたときにポイントになった言葉。同じ種類の困難（アイデアが「内在」していなかった | 原因としてはたらいていなかった | 状態があった）が考えられているのであろう。

77) 前四世紀のクニドス生まれの数学者にして天文学者、医者。プラトンの友人にしてアカデメイアの同僚。「混合」を用いた独自のアイデア論を構想したらしいが資料が少なく、またアリストテレスの著作中にも他に記述がないので、詳しいことは不明である。

78) 不明。

79) 原語は、本巻で「始原」とともにたびたび使われてきた前置詞「エク」（直訳は「～から」）。

80) プラトンの『ティマイオス』二八A以下に登場する「製作者（デーミウルゴス）」のこと。

81) ソクラテスが原因とならなくても、ということ。

82) 様々なアイデアが、類種関係を典型例とする普遍性の上下関係を作りながら相互に「範型」になり合うだろうということ。

83) 類が上位のものとの関係で下位の種として捉え直され、その上位のものがそれに対して類となると、上位のも

[991b2] [一三⁸⁴⁾] さらに、本質存在と、本質存在がその本質存在であるところのそのものが、「離れて⁸⁵⁾」存在することは不可能だと思われることだろう。すると、いったいどのようにして、アイデアは事物の本質存在でありながら、[その事物から]「離れて」存在しうるのだろうか。[991b3] [一四] そして、『パイドン』で次のように語られている⁸⁶⁾、すなわち、存在することにとっても、生じることにとっても、アイデアが「原因」だと。[991b4] とはいえ、たとえアイデアが存在していても、それにもかかわらず、「動かすもの」が存在しない限り、「分有するもの」は生じない。また、多くの別のもの、たとえば家屋や指輪といった、それらにアイデアが存在するとは私たちが主張しないものが生じている。したがって、その他のものも、存在したり生じたりすることが可能なのは、今まさしく語られたような原因⁸⁷⁾によってであることは明らかである。

第九章（後半）

[991b9] [一五] さらに、もしもアイデアが数であるなら⁸⁸⁾、それはどのような仕方で「感覚される事物の」「原因」になるのだろうか。[991b10] [一五 a⁸⁹⁾] 様々な存在が異なる数である⁹⁰⁾からだろうか。

の（「範例」）が下位のもの（「写し」）になる。これが繰り返され、同一のものがオリジナルでありコピーであることになるということ。

84) ここからは私は、Reeve の難問番号とのズレを生じさせるような「a」「b」等の下位区分を基本的に設けなかったので、以降は Reeve の番号をそのまま用いる（私が途中使った番号「九 d」とはズレが生じるのだが、これ以降ズレを表記することにあまり意味はないからである）。

85) アリストテレス存在論の鍵の一つ。何が何から「離れて」存在するか文脈によって様々なので注意が必要。

86) 一〇〇 C | E を見よ。なお、ここでは、従来通り、 a 系・ β 系の両写本の読みを採った（近年の Frede も一番新しい Reeve もそうしている）。底本は、古註に出てくる読み「『パイドン』で私たちは次のように語っている（レゴメン）」を選択しているが、対話篇で「語っている」のは、むしろそれを書いたプラトンであってアカデメイアの学生たちではないから、理解困難な読みである。

87) 「動かすもの」のこと。

88) 本巻第六章九八七 b 二一 | 二二で（「プラトン」の主張として）「あれら【大】と【小】から、【一】の分有によって、アイデアや【アイデア的な】数は成り立っているからである」と言われていた（「Met.A.6 補注 d」参照）。ここでは詳細には触れられず、ただ「アイデアが数である」という考えだけが導入されている。ただし、この条件文で用いられている言葉は、単純な「エイ」ではなく、それへの疑念を暗に示す「エイベル」（cf. Smyth, § 2379）という言葉であることに注意。

89) Reeve は難問の「一五」に下位区分「a」「b」を設けない。

90) 以下に登場する「人間」と「ソクラテス」「カリアス」の「数」の場合には、ソクラテスもカリアスも人間である以上、少なくとも通常の考え方では「同一」である数 | | アレクサンドロスの例では同一の数「五」 | | が考えられる。そして、以下で言われるように、同じ「五」が「あちら」のアイデア数の世界と「こちら」の感覚される物質の世界で「異なる」のは、アイデア数の「五」が「永遠」であるが、感覚される事物の「五」は「永遠」ではないという仕方によってだとされるしかない（しかも、この説明の場合、同じ「こちら」の世界の「ソクラテス」と「カリアス」の「五」は、どちらも「永遠」ではないので、どうしてこの二者の違いが生じるのか説明がつかず、さらに別の説明方式を導入せざるをえなくなるという欠点がある）。それゆえ、たとえば「五」と「六」が「異なる数」であるような仕方で「異なる」ということしか思い浮かべていないなら、それは誤解となる（これは「人間」と「馬」の「数」の異なりの説明の場合であれば正しいであろう）。そのような誤解を生じさせないように、【異なる数】

たとえば、この数が「人間 [のアイデア]」、別のこの数がソクラテス、また別のこの数がカリアスであるという仕方である⁹¹⁾。すると、なぜ「あれら」の「アイデアである」数が、「これら」の「感覚される」数にとって「原因」であるのだろうか。というのは、たとえ一方が永遠であり他方はそうでないとしても「数である」という点では何の違ひもなからうからだ。[991b13] [一五 b] しかもし、「こちら」のものが「協和音」のようにいくつかの数の「比」であるからだとすれば⁹²⁾、「感覚される事物が」[比]として構成されるところのそれらの数には少なくとも一つの何かがあるのは明らかだ⁹³⁾。だから、それが「|」つまり「素材」が「|」何かであるならば、「数自体」もまた、関係し合う二つのもの或る種の「数的な」[比]になるのは明白である。ここで私が言っているのは、たとえば、もしカリアスが火と土と水の数的比であるとすれば⁹⁴⁾、やはり「人間自体」も、或る種の数であろうとかならうと⁹⁵⁾、[991b20] 複数のもの⁹⁶⁾の間の数的比であって、[端的な] 数ではないことになるだろう

に「[何らかの広い意味で]」と補うのが適当である。

91) アレクサンドロスによれば (Alex., 107, 24-28)、「この数」たとえば「五」という数が「人間」[人間自体すなわち人間のアイデア]でも「ソクラテス」でもあるように（ただし本書A（第一）巻第五章の註で紹介したようにピュタゴラス学派の或る伝承によれば「五」は「性質をもった物体」であったから「五が人間」は仮の想定であろう）。

92) 「[こちら]」の「感覚される」ものが「単純に一つの数であるのではなくて」[協和音]のようにいくつかの数の「比」であるから「アイデア数が「感覚される事物」の「原因」になるの」だとすれば」ということ。

93) 原文が簡潔で難解（様々な解釈・対処法・訳し方がある）。アリストテレス自身も説明の必要を感じたらしく、以下で例を挙げている（火と土と水の数的比「|」「五対一対二」としよう「|」であるカリアス）。その際ポイントになるのは、「少なくとも一つ」という限定である。これは、「ゼロ」でないがまた「二つ」であったり「五つ」であったりすることもある場合のみ意味のある言いまわしである。さて、本文の「[[こちら]」の世界の「感覚されるもの」が「比」として構成されるところのそれらの数」とは、この場合、「五対一対二」のことであり、次に、これらの数「に属すものとして」（属格の訳）それぞれに「ある（存在する）」「何か」とは、「火」「土」「水」にあたり、「少なくとも一つ」とは、それらがそれぞれ、（相対量で）「五つ」「一つ」「二つ」あるが、比の項である以上は、どの項をとりあげても、「少なくとも一つ」あることである。もっと詳しい事情については、「Met.A9 後半の補注：991b14「エスティン・ヘン・ゲ・ティ・ホーン・エイシ・ロゴイ」の訳し方について」を見よ。専門家向けに説明すれば、関係代名詞「ホーン」の隠れた先行詞として代名詞「タウタ」ではなく「トゥートーン」を想定している。

94) カリアス（という感覚される個別の人間）が「火と土と水」をたとえば「五対一対二」の比で組み合わせた物体（身体）であってみれば、ということ。明らかに、これは、骨の構成要素である先の三つのものの混合比をそれぞれ「四対二対二」としたエンバドクレス「断片」九六（DK）の発想に基づいている。つまり、おそらく、ピュタゴラス学派的でもプラトニスト的ないしアイデア数論者的でもない。したがって、厳密に言えば内在的な批判とは言えない。ただし、エンバドクレスのこの「骨」観は、アリストテレスが他の著作でも言及している「|」『魂について』第一巻第五章四〇九 b 二九 | 四一〇 a 一三（構成要素から合成されたものとして「骨」だけではなく「人間」も挙げられている点で重要な箇所）、『動物部分論』第一巻第一章六四二 a 一八 | 二四など | 彼のお気に入りの考え方であり、比較的肯定的・共感的に利用されていると言えよう。

95) 「カリアス」の比が「五対一対二」であるという例を使えば、「カリアス」には単位が（五+一+二で）八つあるから、「カリアス」に対応するアイデア「人間」も或る種の数「八」であるのかもしれないしそうではないのかもしれないが、ということ。

96) 先ほどの例で言えば、「火と土と水」などのこと。

し⁹⁷⁾、そしてそのことのゆえに、或る種の数⁹⁸⁾になることもないのである⁹⁹⁾。

[991b21] [一六] さらに、多くの数からは一つの数が生じるが、[仮にアイデアが数であるとして] 複数のアイデアからはどのようにして一つのアイデアが生じるのだろうか。しかしもし、[一つの数が] それら[多くの数]そのものからではなく、「複数の『数のうちに含まれるもの』」から、たとえば「一万」[という一つの数]のうちに含まれるそれらから¹⁰⁰⁾生じるのだとすれば、いくつもの単位「一」¹⁰¹⁾は、どのようになっているのだろうか。というのは、同種のものだとしても多くの奇妙なことが帰結するだろうし¹⁰²⁾、同種のものでないとしても、つまり同じ数のうちの単位同士が同種のものでないとしても、そして或る数のうちのどの単位をとっても別の数のうちの単位のどれとも同種のものでないとしても、やはり多くの奇妙なことが帰結するだろう¹⁰³⁾からだ。[991b26] すなわち、これらの単位は「何かをこうむるということがない¹⁰⁴⁾」以上、何の点で違いが生じるだろうか。実際、それは理にかなっていないし、[単位について私たちが] 考えていることとも合わないからだ。

[991b27] [一七] さらにまた、算術が取り扱っている、別の何らかの数を、つまり或る人たちによって「中間的なもの」と言われているもの¹⁰⁵⁾のすべてを導入せざるをえなくなるが、それらはどのような仕方で存在するのか、あるいはどんな [991b30] 始原から出来ているのか。あるいは、何ゆえにそれらは「こちらの方の」[感覚される]ものと「そのもの自体」との「中間」だということになるのだろうか。

[991b31] [一八] また、「二」に含まれる単位「一」は、その各々が、より先にある何らかの「二」

97) 「一五 a」の再確認。

98) 先の註の「比の項の数を足し算した結果の数 (たとえば「八」)」など。

99) 「一五 b」の結論。

100) どんなに大きな数であっても、それが含む単位は「一」なのであって、たとえば「百」や「千」になることなどないと念を押すために「一万」が挙げられた (Alex., 111, 8)。

101) 「モナス」の意訳(「単位」と「一」の両方のニュアンスを出すため)。繰り返しこう訳すことはせず、基本は「単位」と訳す。

102) これらの「帰結」はおそらくこの講義の聴き手には周知のものであったため述べられていない。「単位同士が同種」の場合に帰結するであろう「奇妙なこと」とは、アレクサンドロスの解釈 (Alex., 111, 15-112, 5; Dooley 1989, 151, n. 326a の線に沿って理解された) では次の通り。すなわち、アイデアは互いに異なっていると想定されねばならないので、「アイデアは数である」という仮定にもとづけば、それぞれのアイデアに対応する数もまた互いに異なっている存在していなければならない。しかし、もしそれぞれの数に含まれる「単位」が性質上同一である(単位同士が同種)ならば、そのような「単位」から構成される数も本質的には互いに異なるものではなく、したがってアイデアも互いに異ならない(つまり任意の数が任意のアイデアになれる)という「奇妙」なことになってしまうだろう。また、性質上同一であるのになお異なるとすれば、それは量的に異なるのでなければならない以上、アイデアが互いに異なるのは量的な違いによってだという「奇妙」なことが帰結するだろう。

103) 単位同士が同種のものでない(性質的に異なる)場合、これら「単位」それぞれのうちに「何らかの違い」があることになる。しかし、以下の本文で言われているように、「これらの単位は『何かをこうむるということがない』(次の註を見よ)以上、何の点で違いが生じるだろうか」。単位同士を区別できるのはその「位置」によってだけなのだが、もし位置をもつとしたならば、それはもはや単純に「単位」なのではなく「点」になってしまう。このような「奇妙」なことが帰結するだろう (Alex., 112, 5-13)。

104) 単位であること以外の性質を受け入れることはない、ということ。

105) 本巻第六章九八七 b 一六に登場していた。

に基づいている。しかしながら、それは不可能なのだ¹⁰⁶⁾。

[一九] さらに、何ゆえに数は取り集められると一つの数になるのだろうか¹⁰⁷⁾。

[992a2] [二〇] なおまた、以上で述べられたことに加えて、仮に諸々の単位「一」が異なるものであるならば、ちょうど根本要素を、四つあるいは二つだと語る人たちでもそうしているように語るべきであった¹⁰⁸⁾。実際、後者の人たちは、その誰もが、それらに共通なもの、たとえば「物体」を根本要素として語らず、共通な何かつまり物体が存在するのであれしなないのであれ¹⁰⁹⁾、「火」や「土」を語っているから。しかし今の場合、「一」が、ちょうど火や水のような「同質部分体¹¹⁰⁾」であるかのように語られているのだ¹¹¹⁾。だが、もしそのようであるならば、数は根本存在ではないことになろう。むしろ、仮にも何らかの「一」それ自体が存在し且つそれが始原であるならば、より多くの仕方でも「一」が語られるということは明らかである。[992a10] さもなければ、そのことは可能ではないからだ。

[992a10] [二一] さて、私たちは、根本存在をその始原に帰着させようとして、線はその始原の「長・

106) 解釈がむずかしい箇所。本巻第六章九八七b二一―二二に『『不定の二』から、『一』の分有によって、[イデア的な]数が成り立つ』という趣旨の言葉があったことからすると、「より先にある何らかの『二』に基づいて[原語「エク」は直訳すれば「から」]」は、『『不定の二』から』であり（トマスは『『二』のイデア』と考えるが）、次の箇所が（その註で指摘するように）「一」が原因として特権的ステイタスをもつことを疑うものであれば、この箇所は、「不定の二」がそれをもつことを疑うものであろう。私の解釈は次の通り。「より先にある何らかの『二』」は「不定の二」、「に基づく」は原因性を表す（厳密には『素材』的な原因性）だが、素材性はここの議論のポイントではなく、次の『『本質存在』的な原因性』の「一」と対比されてはじめて意味をなす）、最初に登場する『『二』』は、イデア的な数「二」（本巻第六章九八七b二一―二二で解釈された『『不定の二』から、『一』の分有によって、(イデア的な)数が成り立つ』に基づく）、「だがそれは不可能だ」とは、イデア数「二」の原因が「不定の二」であることは当然成り立つ。そしてここでイデア的な数に部分があるという想定がありうるとすれば、単位「一」の原因にはそもそも「二」はなりえないはずなのに、イデア的な数「二」の中にある場合には単位「一」の原因が「二」であることになる。「だがそれは不可能だ」と理解した。ただし以上の説明は、或る数の「二」、「二」のイデア、単位数の「一」の組み合わせでも成り立つ。ここでは、九八七b二一―二二との関係や、次の議論との関係を重視して、この解釈を採らなかった。

107) 前註で説明したことからして、この「数」もイデア的な数のことになる。詳しい議論は本書M（第一三）巻第七章一〇八二a一五―二六で展開されているが、たとえば穀粒は、取り集められても決して一つの粒にはならず、ばらばらな粒のまま一箇所に集積されるにすぎないのに、なぜ数は一つの数になるのか、ということ。「数だから」と答えると、本章九八〇b二〇での「数がそれ[第一のもの]だということ」が帰結してしまうという言葉の通り（この箇所は「二」について言われているが）、「一」が原因として特権的ステイタスをもつことを危うくしてしまう。なお、「取り集められると一つの数になる」を、Tricot風に、「複数の単位から構成されているのに一つの単位になる」と意識すると、前の議論の続きであることが鮮明になる。

108) Rossなど諸訳は“*Platonists should have spoken*”と、このあたりではもうアリストテレスが「私たち（プラトニスト）は」という語り方をしていないように訳している。この箇所の動詞「語る」は不定法なので人称や数を特定できない。しかし、以下の九九二a一―で「一人称複数形」が再出現しており、「私たち」語りが続いていると見ることでもできる。

109) この少し奇妙な想定について、詳しくは「Met.A9 後半のテキスト註01」を見よ。

110) 本巻第三章九八四a一四と「Met.A.3 補注c」を参照。

111) ここでもアリストテレスは「私たち」語りをしていない（Rossも“*But in fact the Platonists speak as if...*”と訳している）。

短」から、つまり一種の「大・小」から¹¹²⁾、そして面は「広・狭」から、また物体は「高・低〔深・浅〕」から出来ているのだと想定している。[992a13] だがそうすると、どのようにして、面は線を、立体は線と面を含むことになるのだろうか。というのは、「広・狭」と「高・低」は異なる種類のものだから¹¹³⁾。すると、数が¹¹⁴⁾、[数の始原である]「多・少」とこれら〔線や面や立体〕とは別のものだから、それらのうちにない〔含まれない〕というように¹¹⁵⁾、明らかに、その他のものの場合も、上位のものは下位のものの中にない〔含まれない〕ということになろう¹¹⁶⁾。かといってまた、[面の始原である] 広さは〔物体の始原である〕高さの類であるわけでもない¹¹⁷⁾。もしそうなら、物体は或る種の面であったということになろうからだ。

[992a19] [二二] さらに、点は [992a20] 何に基づいて「中にある¹¹⁸⁾」のか。それで、プラトンは¹¹⁹⁾、このような種類のもの〔点〕を幾何学上の思い込みであるとして、それに異議を唱えさせた。むしろ彼が「線の始原」と呼んだのは | | そして彼がしばしば立てたそれは | | 「分割できない線」であった。しかしながら、〔線〕である以上〕それには必然的に何らかの「端」〔すなわち「点」〕が存在する。したがって、線の存在することが基づいている議論からすれば、点もまた存在するのだ。

[992a24] [二三] 総じて「知恵」は様々な「明らかな事物¹²⁰⁾」について原因となるものの探求であるのに¹²¹⁾、私たちはそれを放っておいてしまった¹²²⁾ (「変化がそれから始まる原因」について何も

112) 本巻第六章九八七b二〇で登場していたいわゆる「不定の二」のこと (Alex., 117, 26-27)。「長短」だけでなく、以下の「広狭」や「高低〔深淺〕」も、この「不定の二」の一種として挙げられている (Alex., 117, 30-118, 1)。つまり一様に「大小」に還元しようとする立場。繰り返されている前置詞「エク」(「～から」と訳した)は、これらが「素材」的な「始原」として考えられていることを暗示している (実際、先述の第六章の箇所で、「大小」について、はっきりそう言われている)。

113) 「〔面の「素材」的な始原の〕「広・狭」と〔立体の「素材」的な始原の〕「高・低」は異なる種類のものだから」ということ。つまり、一様に「大・小」に還元しようとするのは無理ではないかということ。それで、「異なる種類のものだ」と言われている。なお、ここで「種類」と訳した原語は「ゲノス」。アリストテレスの固有な用法では、通常、「種」と区別された「類」と訳されるが、そのようには訳さなかった。英訳も Reeve 「kind (genos)」, Ross 「class」など、工夫している (岩崎訳も同様)。ただし、以下の a一八の「ゲノス」は「類」と (Crubellier 訳のように) 訳すことをしないと議論がうまく流れない。

114) ここで「数」が取り上げられたのは、「線・面・立体」の中にないことが明白であるため。(「数」ではなく「点」なら「線・面・立体」の中にある。このケースが次の段落で検討される。)

115) 「その理由が〔数の「素材」的な始原の〕「多少」はこれら〔面の「素材」的な始原の「広と狭」など〕とは別のものだから」ということ。

116) 「上のもの」「下のもの」とは、文脈的に、数を一番「上のもの」として、順に言えば、線、面、立体が「下のもの」になる。

117) 「〔面の「素材」的な始原の〕広さは、〔立体のその〕高さが属している種類〔同じ種類のもの〕であるわけでもない」ということ。

118) 「線の中に」、あるいはもっと一般的に、「他の幾何学的な対象の中に」。

119) 本章で「プラトン」の名前が挙げられるのはここのみ(章の冒頭で言及されていたのは「アイデアを立てる人たち」)。本章の主たる論敵(あるいは説得の相手)は前者よりむしろ後者の人たちだからか。

120) 「感覚される事物」、すなわち「変化し動いている事物」。

121) 本巻第一二章の「知恵」あるいは「知恵の探求」観が前提されている。

122) 第四章末尾九八五b一九―二〇で、「動について、これがどこから始まって、あるいはどのようにして「あるもの」に属しているのか」という問題は、その他の人たちの場合と同様、彼ら〔原子論者たち〕もまた重視せず、放置した

語らないのだから¹²³⁾。また私たちは、これらの事物の本質存在を語っていると思いながら、それとは別の本質存在があると主張し、それでいて、「あちら」のもの¹²⁴⁾がどのような仕方ですこれらの事物の本質存在であるのかは、中身のない言葉で語っている。すなわち、「分有する」という言葉は、[992a29] ちょうど先にも私たちが述べたように¹²⁵⁾、何も意味しないからだ¹²⁶⁾。

[二四] そうしてまた、[992a30] 私たちが様々な知識にとって原因となるものだと目しており、そのゆえにすべての知性も全自然も「作るはたらき」をなすところのもの、つまり始原のうちの一つであると主張しているこの原因〔目的因〕に、イデアは結びつけられていない。むしろ、近頃の人たちにとっては、数学は他のことを目的として営まれなければならないとの主張¹²⁷⁾にもかかわらず、数学が「知恵を愛し求める〔それ自体が目的の〕営み」になってしまっているのである。

[992b1] [二五] さらにまた、「素材」として基礎に置かれている根本存在¹²⁸⁾はあまりにも数学的なものであって、すなわちそのようなものは「〔何かをこうむる〕素材」だというよりも、むしろその根本存在つまり「素材」に述語付けられて違いをもたらすもの¹²⁹⁾だと想定する人がいるかもしれない¹³⁰⁾。たとえば「〔不定の二〕の」「大と小」がそうだということなのだが、これはちょうど自然学者たちも「濃密と希薄」を語っているようなやり方であって、彼らはそれら「濃密と希薄」¹³¹⁾を、「基礎に置かれたもの」〔空気〕に違いをもたらす第一のものであると主張している¹³²⁾。実際、それらは何らかの「過剰と欠乏」〔つまり「大と小」の一種〕なのであるから。

[992b7] [二六] また、動については、一方でそれら「大と小」が動であることになれば、明らかにイデアは動くことになる。他方で、もしそうでないなら¹³³⁾、動はどこからやって来たのだろうか。というのも、〔動が説明されなかったため〕自然についての研究全体が破壊されたのだから。

[992b9] [二七] そして、簡単だと思われること、[992b10] つまり「万物は一つのものである」

と言われていたが、この「その他の人たち」には、「私たち」（アカデメイアのメンバーないし「イデアを立てる人たち」）も含まれていたというわけである。

123) 本巻第三章以降の「四原因説」が前提されている。

124) イデアやイデア的な数。

125) 九九一 a 二〇 | 二二を参照。

126) 直訳は「～は何でもない」。「難点二三」には「私たち」語りが頻出している。

127) 『国家』第七巻、五三一 D、五三三 B | E を参照。数学の目的となる他のことは「哲学的問答法」（ディアレクティケー）のこと。

128) 本巻第六章（九八七 b 二〇）でプラトンが「素材」としての始原だとしたとされていた（本文でも後で登場する）「大と小」すなわち「不定の二」のこと。

129) 原語は「ディアポラー」。ここでは形相のないし属性的なもののこと。定義を論じる場面では「種差」と訳される。

130) 「述語付けられる」（カテーゴレイスタイ）はアリストテレスの用語なので、彼自身のことか。

131) 「それら」の指すものについて、詳しくは「Met.A9 後半のテキスト註 02」を見よ。

132) アナクシメネスやアポロニアのディオゲネスなどが空気〔素材〕の濃縮化と希薄化によって物体の成立を説明したこと（本巻第四章九八五 b 一― | 一二を見よ）。

133) それら「大と小」が動であることにならない、あるいはイデアが動くことにならないのならば。

を証明することも、なされない¹³⁴⁾。なぜなら、「事例提示¹³⁵⁾」によっては、万物が一つのものだということにはならず、むしろ | | 仮に [彼らの想定] すべてを認めてくれる人がいればだが | | 「或るもの自体」[イデア]が一つのものということになるから。ただ、そのことすら、「多の上の一」「共通なもの」としての] 普遍が類であると認められないなら、出てこない。しかもいくつかの事例において、それは不可能なのだ¹³⁶⁾。

[992b13] [二八] なお、「[イデア的な] 数の後に来るもの」すなわち [イデア的な] 線や面や立体が¹³⁷⁾どのような仕方 で存在していたり生じたりするか説明されないし、「原因としての」何らかの力をそれらもつかどうかとも説明されない¹³⁸⁾。というのも、それらは、[i] イデアではありえないし（「数の後に来るもの」であって] 数ではないから）、また、[ii] 「中間のもの」でもありえないし（それは「イデア的なものではなく」「数学的な」もの¹³⁹⁾「つまり消滅しないが「多」な

134) 「万物」（文脈によっては「すべてのもの」と訳してきた原語「(ハ) パンタ」は複数形なので「多」のニュアンスがあり、「多くの事物は（多くの事物として）一つのものであることにはならない」という含みがある（Alex, 125, 9の「人間たちが人間たちとしては一つのものであることにはならない」「人間自体（人間のイデア）は一つのものであることになる」を参照）。「万物」が「一」を「分有」している場合、「一」を分有するものは「一」と同じ名「一つのもの」をもつことになって「一つのもの」である（「美」を分有するものは「美しいもの」であるように）ので、「万物は一つのものである」と「容易に」なりそうだという話になる（しかし「ならない」と話が續くわけである）。また、「万物は一つのものだ」は、タレス以来の愛知者たちがなしてきた主張 | | たとえば「万物は水だ」など | | であり、伝統的に数多くの人がなしてきた主張であることも、「簡単だと思われる」要因の一つかもしれない。

135) 原語は「エクテシス」だが、アリストテレス自身の『分析論前書』第一卷第六章二八 a 一〇 | 三〇で説明されている「抽出」（第三格の推論を証明する方法）のことではなく、ここでは「多の上の一」に含意される（いわゆる）「プラトンの方法」、つまり、同じ名の多くの事例を列挙し「多」の上の「一なるイデア」を示す仕方のこと。

136) 「それ」とは「普遍が類である」こと。類とは、「種的に異なる多くのものについて、それらの『何であるか』[本質存在]を表すものとして述語されるもの」（『トピカ』第一卷第五章一〇二 a 三一 | 三二）、あるいは、「共通なもののうち、とくに『何であるか』を表すものとして述語される」もの（同、池田訳に準拠。表現を少し変えた）。後者の「共通なもの」を「普遍」とすれば、「普遍」には「本質存在」を表さないもの、つまり、「類」ではないものもあることになる。本章九九〇 b 一三以下によれば、「～ではない」と言われるものや「関係」、また B（第三）卷第三章九九八 b 二二によれば、「存在」や「一」は、普遍であっても類ではないものに該当する。

137) これらの「線・面・立体」は、すぐ後で「中間の、数学的な」ものではないとされるので、「イデア的」なものとして想定されている。アレクサンドロスは、ここでの「線」（メーコス）を「線自体」（アウトメーコス）などとパラフレーズしている（Alex., 128, 3-4）。背景にある考えについては、次の註を参照。

138) ここでの議論では、アカデメイアの或る人たちにとって、[i] イデア的な数か、[ii] 「中間にある、数学が扱う[数学的な]」数か、[iii] 「感覚され消滅する」数があるということが前提となっている（本卷第六章九八七 b 一四以下を参照）。そして、「イデア的な数」と「数学的な数」のように、「イデア的な線・面・立体」と「数学的な線・面・立体」があると想定され、また、「後」のものに対して「先」のものは「[原因としての] 力をもつ」ともされているようである。ただ、「先のもの」としてのイデア的な数から「後のもの」としての「線・面・立体」が生じる仕方や存在の仕方が分からないなら、後者の存在論上の位置づけが不明だということになるわけである。（少し後の本文の言い方では「別の第四の類」にするしかない。あるいは、イデア的な数を [ia], イデア的な線・面・立体を [ib] にするなどであろう。）

139) つまり消滅しないが「多」。

のであるから¹⁴⁰⁾), [iii] 消滅する [感覚される] ものもありえない¹⁴¹⁾。むしろ, それは, 明らかに, また別の四番目の類としての何かだということになるのだ。

[992b17] [二九] また総じて, 様々な存在の根本要素の探求をする場合, 「[存在が] 多くの仕方で語られる¹⁴²⁾」のに, その区別をしない人がすると, その根本要素を発見できない。[992b20] とりわけ以上のようなやり方で「存在がどのような根本要素から出来ているのか」を探求する人たちがやれば, なおのことそうだ。なぜなら, 「どのような根本要素から『能動』や『受動』あるいは『直』が出来ているのか」を把握することなどできないのは確かであって, もしできるとすれば, 根本存在に属するもののみであるからだ¹⁴³⁾。したがって, 「存在するすべてのものの根本要素を探求する」とか, あるいはそれを「発見したと思う」とかは, 本当のことではないわけである。

[992b24] [三〇] だが, すべてのものの根本要素を学ぶことすら, 人はどのようにしてできるのか。というのは, 何事であれ, 前もって知ることなど, ありえないのは明らかだからだ。すなわち, ちょうど幾何学することを学んでいる最中の人にとって, 一方ではそれ以外のことを「前もって知っている」ことは可能なのであるが, 他方ではその知識が関わっているもの, つまりその人がこれから学ぼうとしている当のものを, 前もって認識することなどないように, 他の場合もまたそのようであるのだ。その結果, たとえ或る人たちの主張するような, すべてのものの何らかの知識が存在するとしても, 「このような知識を学ぶ」その人は何も前もって知っていることなどできないだろう。

[992b30] しかしながら, あらゆる学びは, 前もって認識されているいくつかのものを通じてなされるものなのであって, このことは, それらすべてを通じてなされるものであれ, それらのうちのいくつかを通じてなされるものであれ¹⁴⁴⁾, 同様に成り立つ。すなわち, 学びには, 論証を通じてなされるものもあれば, 定義を通じてなされるものもある。(それらから定義が構成されるところの当のもの [定義の構成要素] は, 前もって知られていることが, つまり熟知しているものであることが必要であるから。) 同様に, 「事例の列挙による導き¹⁴⁵⁾」を通じてなされる学びもある。[992b33] かといって, [993a1] 仮にその知識が事実として生来のものであるとしても¹⁴⁶⁾, 私たちが, 知識のうちで最もすぐれたもの¹⁴⁷⁾を所有していながら, いったいどうしてそのことに気がつかないでいる¹⁴⁸⁾か不思議だ。

[993a2] [三一] さらに, どんなものから [存在が] 出来ているのかを人はどのようにして知るのだろうか, またどのようにしてこのことは明らかになるのだろうか。というのは, この問題も行

140) しかし, イデア的な線・面・立体はそれぞれが「多」ではないはずである。したがって, これらは「中間的なもの」でもないであろう, ということ。

141) イデア的な線・面・立体は消滅しない。なお, 数学が扱う線・面・立体も, 「多」なのだが消滅しない。

142) アリストテレス存在論の根本的な洞察が登場している。

143) これも同じく彼の存在論の基本。

144) 先に知られているものの「いくつか」を通じての学びの場合とは, 後で登場する「論証」の場合のこと(小前提が結論の前ではなく結論と同時に知られることがあるため)で, 「すべて」を通じての場合とは「定義」や「事例の列挙による導き」(エバゴーゲー)の場合のこと(Alex., 131, 10)。

145) 原語は「エバゴーゲー」で, 従来, 「帰納」と訳されることもあった。ここでは, 文脈的に, 先の「エクテシス(事例提示)」と大差ないと考えられる。

146) プラトンの想起説(『メノン』八一C, 『パイドン』七二E)。

147) イデアの知識のこと。

148) 想起説では, 生まれるときに, イデアの知識を自分もっていることを忘れてしまうので。

き詰まるからだ。実際、そのことで論争する人が誰かいるかもしれないから。ちょうど若干の「綴り」についてさえ¹⁴⁹⁾論争する人たちがいるように。すなわち、一方の人たちは、「za」は「[s]と[d]」そして「a」から出来ていると主張し¹⁵⁰⁾、他方の或る人たちは、それ[z]は特別な音なのであり¹⁵¹⁾、熟知している音のどれでもないと主張しているから。

[993a7] [三二] さらにまた、感覚が関わっている事物を、人が、感覚をもたず知ることなど、どうしてできるだろうか¹⁵²⁾。しかしながら、少なくとも次のことが仮定されるなら、できねばならなかっただろう。すなわち、ちょうど複合的な音声が[993a10] [音声に] 固有な根本要素に由来するように、すべてのものの由来する根本要素が同じであるならば。

第一〇章

[993a11] それで、[以上の] 全員が、自然に関する諸論考で述べられた原因を探求しているようであり、また私たちはそれらの他には何も原因を述べることができないであろうということが、先に述べられたことから明らかである。しかし、彼らの原因の探求は、ほんやりとした仕方¹⁵³⁾でなされている。つまり、或る意味で原因は先にすべて語られたのだが、別な意味では何も語られていない¹⁵⁴⁾。なぜなら次のようであるからだ。すなわち、知恵を愛し求める初期の活動は、どんなこ

149) 「綴り」が何から出来ているかさえ論争になるならば、「存在」が何から出来ているかはなおのこと論争になるだろうという含み。「綴り」の例は原子論者たちによる事物と原子のたとえであり、「字母」と「構成要素」も原語は同じ「ストイケイオン」であったから（本巻第三章の註および第四章の訳本文の末尾を参照）、ここでの議論に非常に効果的。

150) 本書N（第一四）巻第六章一〇九三a二〇によれば、ゼータ（ζ=z）をいわゆる「複子音」/ds/だと考える人たちもいた。

151) 「音」は単数形。「[分解されない] 別の [一つの] 音」ということ。

152) アレクサンドロス¹⁵²⁾は次のようにコメントしている (Alex., 133,22ff) | | このことをアリストテレスは述べるのは、「あらゆる事物に同一の始原や根本要素は存在しないということ」のためである。なぜなら、もしあらゆる存在に共通な何らかの始原があったとすれば、これを学んだ（想起説で想定されるような「生まれる前にアイデアを学んだ人」のような）人は、これを通じて、あらゆる存在を認識することができたことであろうから。すなわち、文字つまり根本要素（字母）を知った人は、あらゆる文字とそれらから組み立てられたあらゆる音声を認識するように、様々な存在の始原を知った人には、始原を通じて、始原から出来た様々な存在を認識するということが帰結するであろうから。だが、もしそうであるなら、そういった始原を知った人は、（感覚がなくても）「感覚される様々なもの（諸物体）」をも認識することができるであろう。（しかし、註で挙げた『生成と消滅について』第一巻第五章三二〇b二三の「共通な物体というものには存在しない」によれば、万物に共通する始原（物体）というものはないのであった。）

153) アリストテレスが彼以前の「知恵の探求者」ないし「愛知者」を特徴付ける際に用いる言葉「ほんやりとした仕方で（なされている）」は、この段落の最後に出てくる「明晰な仕方では（してい）ない」と同じ意味で、本巻の第四章九八五a一三、第七章九八八a二二でも登場していた。

154) 拙訳の「しかし、彼らの探求は、ほんやりとした仕方¹⁵³⁾でなされている。つまり、或る意味で原因は先にすべて語られたのだが、別な意味では何も語られていない」という箇所¹⁵⁴⁾の原文について近年興味深い改訂案が提示された。その改訂案によれば、訳は「しかし、彼らは、原因を、ちょうど先にも語られたように [本巻第七章の冒頭部への

とに關しても、その活動がまだ若く始まったばかりであったかぎり、子どもがたどたどしく話すようであった¹⁵⁵⁾し、[993a17] 実際、エンペドクレスにしても、「骨があるのは『ロゴス』によってだ」と主張してはいる¹⁵⁶⁾けれども、「ロゴス」とは、事物の「これこれ『である』とはそもそも何であったのかということ」すなわち本質存在なのである。しかしそうすると同様に必然であるのは、肉もそれ以外の [993a20] 各々も「ロゴス」であるか、あるいはそれらの何一つとしても「ロゴス」でないかである。なぜなら、肉があり骨がありそれ以外のものの各々があるのも、そのゆえであって「素材」のゆえではないであろうが、しかし、あの人 [エンペドクレス] が語っているのは「素材」すなわち「火」や「土」や「水」や「空気」の方なのだから。こういったことを他の人が語っていたなら、彼は必ずや同意したことであろう。[993a24] しかし彼は、明晰な仕方では語らなかったのである。

さて、以上のようなことについては以前にも明らかにされてしまっている¹⁵⁷⁾のだが、その同じことについて誰かが行き詰まるかもしれないかぎりのことを、もう一度¹⁵⁸⁾私たちは振り返り立ち入って論じよう¹⁵⁹⁾。なぜなら、おそらくはそのことから、のちに行き詰まったときのために何か突破口を見つけることができるかもしれないからだ¹⁶⁰⁾。

[訳文おわり]

バック・レファレンスと考えられる] ほんやりとした仕方である意味ではすべて探求しているのだが、しかし別な意味では何も探求していない」と変わる。詳しくは、専門家向けの「Met.A.10の補註 九三三a一三 | 一五の原文の新しい改訂案について」を見よ。

155) 「アリストテレスと歴史感覚」を論じるときのキーワードの一つ「子どもがたどたどしく話すよう」も、本巻第四章九八五a五に登場していた。

156) エンペドクレス「断片」九六(DK)に対応する記述「すると白い骨ができた」があり(その断片では彼の「ロゴス」は「構成比」の意味)、ここでも「骨」を主語にした。アリストテレス的に明快な表現は「骨が[骨で]あるのは『ロゴス』によってだ」になろう。

157) 現在完了形が使われている。おそらく『自然学』第一巻と第二巻のこと。

158) この箇所以前に本書で初めに「行き詰まり」を見ていくと言っていたのは、本章と同じく「まとめ」の性格をもつ第七章の九八八b二〇以下である。つまり、「行き詰まり」を見た本巻の一つ目の試みは、第八章と第九章だったということになる。

159) ここで「振り返り立ち入って論じる」と敷衍して訳した原語「エパネルコマイ」は簡単に「振り返る」と訳すこともできたのだが、あえてこのように訳した。それは、この語が「エピ・アナ・エルコマイ」に分解でき、第三(B)巻第一章の「立ち入って論じる」と訳した「エベルコマイ」<「エピ・エルコマイ」と関連のあることを明示するためである(「アナ」を「振り返り」という訳語に対応させ、共通する「エピ・エルコマイ」を「立ち入って論じる」と訳した)。ここで「(行き詰まりを) 振り返り立ち入って論じよう」と呼びかけられている当の作業は、本書第三(B)巻の一連の考察であると解する。

160) 第三(B)巻へのつなぎの言葉と考えられ、第二(a)巻が現在の(A巻とB巻の間の)位置にはもともとなかったことを暗示している。「そのこと」(第三(B)巻での考察)と「のちに行き詰まったとき」(将来ありうる行き詰まり、具体的には第四(Γ)巻と第七(Z)巻以降の考察でのそれ)はRossの理解の線に沿って訳している。なお、「そのこと」や「のちに行き詰まったとき」のそれぞれが何を指すかについては解釈が分かれている。

補注

Met.A.8の補注 九八九 a 三四の「混合されてしまっていた」について

現在完了形は、一般に、何かよりも前にあった動きや作用の結果を記述するのに用いられる。したがって、この現在完了形が「初め」よりも前のことを含意する。以下でアリストテレスは、この不合理な帰結を突いてくる（直後の「難点 A 一」や九八九 b 一三 | 一五を見よ）。

だが、アナクサゴラス自身の現存する断片では、「初め」の状態の肯定的な記述に現在完了形や完了語幹の語ではなく過去形の一つのアオリスト形を使っている（「断片」一の有名な言葉「万物は渾然一体として『あった（エーン [[『エイナイ（ある）』のアオリスト形]]』」など）。

アオリスト形は、瞬間的に過去に焦点を合わせて記述する「点過去」とも言われる時制で、以上のような現在完了形の含意をもたない。現在完了形が用いられているのは、否定的あるいは仮定的な言明である。たとえば「断片」一二では、「知性は…… [中略] ……いかなる事物とも混合されてしまっていた…… [中略] ……もし何か他のものと混合されてしまっていたならば……」と言われている。この場合も以上のような不合理な含意をもたない。（以上、Primavesi 2012, 242-244 による。）

ひょっとすると、動詞の時制に関わるアナクサゴラスのこの繊細な使い分けが、アリストテレスには分かりにくかったのかもしれない。

Met.A.9前半の補注 九九〇 b 二の「同じ数だけ導入」について

イデアは、個物ごと（たとえばソクラテス）にはなく、同じ名称（「人間」）が適用される多くの個物（人間たち）からなる一つのまとまりごとの一つずつ存在する（プラトン『国家』第一〇巻五九六 A）から、個物とイデアでは当然イデアの数の方が少なくなり「同じ数」にはならない。

したがって、もし『こちら』に存在する様々なものを個物のことだと解するならば、「一つの個物は複数のイデアを分有するから大雑把には言えば同じ数になる」（Ross）とか、あるいは、これから述べられる数々の異論への「導入」として聴講者の関心を引く「ジョーク」（Frede）だとか、要するに、「厳密に成り立たなくてもかまわない」と考えることになる。

しかし、『国家』の先述の箇所などの、イデア論の定式化を重く見て、『こちら』に存在する様々なものを、「多くの個物からなる一つのまとまり」の複数形と解することも可能である。後者は、「個物」ではなく「種」（エイドス）だとするアレクサンドロス（Alex., 77, 4-6）以来の伝統ある解釈であり、現代にも有力な支持者（Cherniss）がいるが、Gonzales-Varela, 2018 は別の案を出している。

この問題はアリストテレスのイデア理解にとって重要なものではあるが、さしあたってどの解釈をとってもこれ以降の議論の進行には影響しないこともあり、ここでとめておく。

Met.A9 後半の補注：991b14 「エスティン・ヘン・ゲ・ティ・ホーン・エイシ・ロゴイ」の訳し方について

Ross/Primavesi 共通のテキスト：[991b14] ἐστὶν ἕν γέ τι ὄν εἰσι λόγοι.

まず確認しておく、最初の（「エスティン」の方の）動詞「ある」を、「～は…である」と訳すか、「～が存在する」と訳すか（こちらの訳の方が多い）が、諸訳の分かれ目である。

では、いくつかの英訳やその他の近代語訳を振り返っておこう。（なお、訳文のゴシックによる強調は引用者。）

Ross 訳 : the things between which they are ratios are **some one class of things**.

Ross は注解で「複数の『ホーン』を単数の「フー」に改訂する提案」 | | 写本上の根拠はない | | 「がなされたことがあるのだが, [テキスト上の理由] アレクサンドロスが『ホーン』を読んでいるし, [議論上の理由] しかも複数形が要求される。なぜなら, 比は二つの項を含むから」と言っており, 「**some one class of things**」は複数の項が一つのクラスを形成することを言わんとするものであることが分かる。比の項は「一」・「二」・「三」等々であるから, それらの「或る一つのクラス」とは結局「数」のことになる。これが次の文で「素材」だとされており, 本巻第五章で「数」が「素材」と言われていたことからするとよさそうにも思われる (Crubellier はこちらの可能性を考えてはいないようだ)。だが, それはピュタゴラス学派の「数」について言われていたことであるから, 第九章のこのプラトニスト論でも成り立つかどうかは疑わしい。さらに, 次の文でアリストテレス自身の挙げる「『カリアス』が『火と土と水の数的比』である」という例で単なる「数的比」ではなく物質的構成要素のそれが登場することと相性がよくないように思われる。しかしだからといって, この例との整合性を考えて, 「**some one class of things**」が何か物質的な素材のことであるとすれば, そのような物質的な素材の「クラス」という言葉は, Crubellier の指摘するように, 「クラス」的つまり普遍的な「素材」いわゆる「第一質料」(materia prima) に近くなるが, このようなものはここで正当化されてはいない。したがって, いずれにしても, Ross の解釈はうまくいっていないことになる。

Bohn's Classical Library: M'Mahon 1857 訳 : It is obvious that **there will be** a certain one thing, at least, amongst those of which there are ratios or proportions.

Loeb Classical Library 1933 訳 : **there is some one class** of things of which they are ratios.

Hope 1952/1960 訳 : it is clear that the things between which they are ratios are **in some sense one**. 私のコメント: 原文の「ティ」を副詞的対格として処理している「**in some sense**」がユニークである (文法的に可能)。

Apostle 1966/79 訳 : (On the other hand, if it is in view of this, that the things about us are ratios of numbers, harmony, clearly) **there is still one thing in each of the numbers which form that ratio**.

Penguin 訳 : **there will be some one thing** of which they are the account.

Reeve 訳 : **there is at least one thing** of which they [= the things that exist here] are the ratios.

Crubellier 訳 : the things of which they are ratios, **are some reality which is one**.

Tricot を含めた仏訳 3 種は, すべて「～が存在する」式 (il y a か il y ait)。

Bonitz の独訳も「～が存在する」式 (es muss ... geben) だが, 「ホーン」を単数形の関係代名詞 (dessen) で訳している。Reclam 版 (Schwarz) の独訳も「～存在する」式 (es ... gibt) で, 「ホーン」を単数・複数どちらもカバーできる形 (woran) で訳しているのは巧妙である。

次に, 対照的な邦訳 2 種を中心に英訳などを含めて諸訳を比較すると次のようになる。

- ・出訳: 「まず明らかに, この数の比がまさにそれらのあいだの比であるところのそれらは, なにか或る一つのもの [ヘン・(ゲ)・ティ] にちがいない。」
- ・この出訳の特徴:
 - (1) **Ross** と同じく「～は…である」式で, 岩崎 (**Reeve**) 訳の「～が存在する」と反対である。これは, 翻訳では少数派である (他は, **Crubellier** 訳くらいしかない)。
 - (2) 「『複数のもの (『それら』) が単数のもの (一つのもの) である」という文が出現することにな

るが、それはどういう意味なのか」という疑問を引き起こす困難がある。

しかし **Ross** はこれに巻き込まれない。述語の「ヘン・ティ」を「one class of things」と処理することでこの困難を回避している。非常に巧妙な対処であるが、「ヘン・ティ」だけでこのように自然に訳せるのか、そしてそんなものがここで帰結するのは疑問である。言わばつじつま合わせのようにも見える。

実際、**Crubellier 308** は、**Ross** のように「ヘン・ティ」を「one class of things」と訳すことには賛成しない。なぜかといえば、そのように解された「ヘン・ティ」は「第一質料」あるいは「『素材』一般」のような何かを意味するであろうが、それを議論のこの段階で論証するポイントが理解できないように、そんなものはここでの前提からは帰結しないからだという。

かといって、「～が存在する」という訳に彼はそもそも賛成していない。**Ross** の言う通り「比」は二つの項を含む以上、感覚される事物がそれらの項の「比」であるところのそれら複数の項（複数の「数」）として（普遍的な「素材」一般ではない）「一つのもが存在する」、つまり項である「数」が一つだということなどありえないからである。

アリストテレスのここでのアイデアは、**Crubellier 308-309**によれば、ギリシア語の「数」は通常「整数」(integer) のことであるから（言い直せば、小数や分数などでしか表現されないような「きれいに割り切れない数」ではないのだから、つまり「自然数であるから」あるいは「有理数であるから」）、複数の数による自然物の十分な記述は（きれいに割り切れる記述結果が出るように）「絶対的に単純な諸項への分析」を前提とするということであり、**Crubellier** の訳文の「**some reality which is one**」はこの「絶対的に単純な項」のことを言わんとするものなのである。

さて、アリストテレスの念頭にある比の項が「絶対的に単純な項」からなることを疑うものではないが、そうするとやはり、「『複数のものが単数のものである』とはいかなることか」という困難に巻き込まれる弱点が、或る意味で復活することになると思われる。なぜなら、「である」という動詞がここでは「前提とする」という意味だとするのには無理があるからである。しかし、**Crubellier** はそのことに気づいているように思われなし、少なくともそれに触れない。そして、「少なくとも」を活かせる見込みもあまりないように思われる（実際訳出していない）。というのは、「絶対的に単純な単位」は、「少なくとも一つ存在する」のでは不十分であって、すべての単位が絶対的に単純でないと、きれいに割り切れる分析結果が出ないからである。

岩崎訳：「関係がそのものの関係であるところのある一種のものの存在することは確かである。」

この岩崎訳の特徴：

- (1) **Reeve (Tricot, Loeb, Penguin)** もと同じく「～が存在する」(Reeve: it is clear that **there is ...**; Tricot: il est clair qu'il y a ...) と訳している。翻訳では多数派である。対する「出訳」は **Ross** と同じく「～は…である」式 (**Ross**: the things ... **are** some one class of things) に訳しているのであった。
- (2) 出訳の場合に直面する「複数のものが単数のものである」の困難には、そもそも巻き込まれないという長所がある。

以上、必ずしも多数決というわけではないが、「複数のもの（「それら」）が単数のもの（一つのもの）である」となる困難が回避できることは大きいメリットなので、岩崎・**Reeve** 式の訳し方を採用し、その新しいバリエーションを作ることにした。この解釈の少し弱い点はおそらく「それぞ

れ」を挿入する手続きにあるだろう。「それぞれ」をかませないなら、複数のもの（の「それぞれ」にはなく一まとめにされたそれらに「共通」に「少なくとも一つのもが存在する」と読む案も一応考えたのだが、この場合もやはり「少なくとも」はなくてもかまわなくなるので、その点に問題がある。したがって、瑕瑾はあるが、註で述べた解釈を最終的に選択したわけである。

Met.A.10 の補註 九九三 a 一三 | 一五の原文の新しい改訂案について

問題の部分の直前にある（異なる読みのない）部分は、

[直前の部分 993a11-13] 「それで、[以上の] 全員が、自然に関する諸論考 [[自然学]] で述べられた諸原因 [四原因] を探求しているようであり、また私たちはそれら [四原因] の他には何も原因を語るができないであろうということが、先に述べられたこと [本巻第三章から第六章、そして特に第七章の冒頭であろう] から明らかである [[からも明らか] の「も」(カイ) は、「第八章と第九章から明らかであるだけでなく」という意味であろう。]

である。そして、続く箇所の従来の読み（底本の Primavesi も採用する）は、

[旧来の読み] “ἀλλ’ ἀμυδρῶς ταύτας, καὶ τρόπον μὲν τινα πᾶσαι πρότερον εἴρηγται τρόπον δέ τινα οὐδαμῶς”

で、これは次のように訳される。

[旧読の直訳] 「しかし、ほんやりとした仕方ですれら [諸原因] を [彼らは探求している]。つまり、或る意味で [それら] すべてが先に語られたのだが、別な意味では何も [語られて] ない。」

次に、新提案は、Alex., *In Met.* の A 巻第 7 章の部分 (63, 26-31) に引用された標題箇所の、従来見過ごされてきた読みを利用する。主格「πᾶσαι」を対格「ἀπάσας」に、複数形「εἴρηγται」を“v”の削除された単数形「εἴρηται」に変更し、その前に「ὡς καὶ」を置いて、アリストテレスではおなじみの「先にも述べられたように」という言いまわしを登場させるほか、コンマを挿入したり削除したりして、

[新提案の読み] “ἀλλ’ ἀμυδρῶς ταύτας [コンマ削除] καὶ τρόπον μὲν τινα ἀπάσας, [コンマ挿入] ὡς καὶ πρότερον εἴρη [“v” 削除] ται, [コンマ挿入] τρόπον δέ τινα οὐδαμῶς”

とする。この場合は次のように訳される。

[新読の直訳] 「しかし、彼らは、それら [諸原因] を、ちょうど先にも語られたように、ほんやりとした仕方ですれら [諸原因] を、（を） [探求している] のだが、しかし別な意味では何も [探求して] ない。」

まず、従来の読みの問題点 | | 少なくともギリシア語で読む者を戸惑わせる点 | | は何かあるだろうか。

第一に、構文の突然の変化が奇妙に感じられるだろう。コンマの前では「(彼らは) 探求している」という能動相の動詞が省略されていると考えられ、その目的語として「諸原因」が(女性複数) 対格形の代名詞で「ταύτας」と言われていた。しかし、コンマの後では、突然、動詞が「(それらは) 言われていた」というように能動相から受動相になり、その主語として、「彼ら」は姿を消し、代わりに、(女性複数) 対格形だった「諸原因」が主格形（「πᾶσαι」）になってしまっている。このように構文を突然変化させるいい理由があるとは思われないのである。

第二に、「先に語られた」という言葉の使われ方が奇妙に感じられるだろう。この言いまわしは、a 一三行目では「第三章から第六章」の文のことだと考えられるし、一般にアリストテレス自身の言葉に言及するときに使われる言葉なのだが、ここでは、アリストテレス自身の言葉ないし文では

なく、四つの種類の原因がアリストテレスの先行者たちによって（アリストテレスより）「先に語られた」という意味になっている。アリストテレスではほとんど見かけない――コルプス・アリストテリクム全体でも他に七回しか出てこない――「εἰρηνται」という三人称複数現在完了受動相の形も奇妙であり、特に、その内の六回は、動作者が彼自身、つまり、「（アリストテレスによって）先に語られた」という、彼自身の著作への言及であり、残る一回も「ことわざが（ギリシア語を語る任意の人によって）語られている」と言うにすぎないので、いっそう奇妙なのである。

第三に、最初に挙げた「構文の突然の変化」が、議論が焦点を合わせているものに奇妙なズレを生じさせている。すなわち、最初はアリストテレスの「先行者」（「彼ら」）という人間に焦点が合わせられているのだが、すぐに「諸原因」という事柄にズラされてしまっているのである。

さて、Kotwick 2021 は、その著書 *Alexander of Aphrodisias and the Text of Aristotle's Metaphysics* 2016 において、アレクサンドロスの『形而上学』注解が、現在伝えられている α 系写本や β 系写本よりも、もっと古いバージョンの『形而上学』へ私たちがアクセスさせてくれると考えており、特にこの箇所については、 α β 系とは別のより良い本文をもっていると主張する。具体的に言えば、第七章――第一〇章ではない――の注解（63, 26-31）でアレクサンドロスが引用している第一〇章の本文が、私たちに伝わっており通常参照される α β 系の第一〇章の本文とは異なるということが認識されず校訂作業において使われなくなっていることに着目する。それが先に示した「新提案の読み」であり、これは先の三つの難点をすべて回避できている。

最初、私（坂下）は、「この本文は出来すぎで後世に分かりやすく修正されてしまったバージョンではないか、したがって、『より困難な読みの方を残す』という古典文献学の原則からすると採用を見送った方がよいのではないか」と考えた。

Kotwick は、このような疑念は完全に否定できないものの、次の二つの理由から、そのような「書き直し」はあまりありそうにないことだとしている。

第一に、従来の読みとの大きく違う部分「ἀπίστος, ὡς καὶ πρότερον」を、大文字ばかりでコンマも記号もない当時の書き方に直した「ΑΠΑΣΑΣΩΣΚΑΙΠΡΟΤΕΡΟΝ」は、（おそらく「ΑΣΑΣ」という「ΑΣ」の反復や「ΑΣΑΣΩΣ」という「母音+Σ」の三連発によって見間違いが起こって）「ΑΣΩΣΚ」を飛ばしてしまったという単純な間違い（と、「ΑΠΑΣ」の初めの「Α」の、さらにその前の「ΤΙΝΑ」の最後の「Α」との重字による脱落が必要――ただしその場合意図的に省略されるなら普通は「ΤΙΝΑ」の最後の「Α」の方――だろう）によって容易に生じる。つまり、「ΠΑΣΑΙΠΡΟΤΕΡΟΝ」→「πίσαι πρότερον」となる。

第二に、この新しい読みは、アリストテレスが彼の先行者たちに下す評価について、（Jaeger に疑問視された）第一〇章の身分と機能について、そして『形而上学』A（第一）巻の統一性についてすら新しい展望を開く。

新しい読みの（直前の異論の出ていない部分から引用を始める）「それで、[以上の] 全員が、自然に関する諸論考『自然学』で述べられた諸原因〔四原因〕を探求しているようであり、また私たちはそれら〔四原因〕の他には何も原因を語るができないであろうということが、先に述べられたこと〔本巻第三章から第六章、そして特に第七章の冒頭〕からも明らか〔第八章と第九章から明らかであるだけでなく〕という意味」である。しかし、彼らは、それら〔四原因〕を、ちょうど先にも語られたようにぼんやりとした仕方で或る意味では〔それら〕すべて（を）〔探求している〕は、第七章の九八八 a 二〇―二三の「しかしそれにもかかわらず、以上から少なくとも次のような結論だけは得られる。すなわち、始原や原因について語る人たちのうちの誰一人としても、

自然についての諸論考の中で私たちによって区別された以外の始原・原因は述べなかった。むしろ明らかなのは、彼らがみな、それらに、ぼんやりとした仕方ではだが或る意味では触れているということだ」という（言わば穏健な肯定的）評価に見事に対応している。

だが、第一〇章では、第七章になかった点も付け加わっている。すなわち、「しかし別な意味では何も探求していない」である。この言わば厳しい否定的な評価の部分が、第八章から第九章の考察で得られた成果なのである。第一〇章の「ちょうど先にも語られたように」というバック・レフェレンスは、先の第七章の評価を思い出させると共に、それが第八章から第九章の反省を経てここ第一〇章で補正（adjust）される――すなわち第七章の評価は暫定的（interim）だった――ということを読者（聴衆）に意識させるはたらきをしている。

これは、《アリストテレスは第一〇章を第七章より後に書きしかも第一〇章で第七章を置き換える意図（intention to replace）をもっていたのに、後世の編集者が第一〇章の置き場所に困って巻の最後に置いた》という W. Jaeger の影響力のあった（しかしミスリードな）テシスを排除する。A 巻は、学者たちが主張したような、ごたませのパッチワーク（jumbled patchwork）ではなく、アリストテレスの先行者たちによる知恵への寄与を漏らさず理解するという教育的（didactic）な過程における一連の一貫した歩みとして彼によって構成されたのであり、新提案の読みにより、このことの強力なエビデンスを獲得した。この読みは、A 巻という構造物の中で第一〇章の目的を評価する助けとなる――このように Kotwick は言う。

さて、この Kotwick の新提案に対する私の評価を述べると、二点目は、やはり出来すぎだとは思いつつ、率直に興味深かった。一点目の説明は、「K」の文字の脱落の合理的説明がないという点で弱い。だが、「先にも述べられたように」で第七章を明確に指示できるのは強みだと思われる。単純に棄ててしまうのは惜しく、今回、本文訳には取り入れなかったが、ここで紹介した次第である。

テキスト註

Met.A9 後半のテキスト註 01

少し奇妙な想定なので、「物体が存在する [と彼らが考える] のであれ存在しない [と考える] のであれ」と補う案 (Reeve), 『生成と消滅について』第一巻第五章三二〇 b 二三の「共通な物体というものには存在しない」という考えに言及されていると想定して「共通な物体が存在するのであれしないのであれ」という意味に解する案 (Ross), 折衷的に「[彼らの考えでは] 物体が共通な何かであるにせよないにせよ」とする案 (Crubellier, p. 315, n. 45. しかしこのように「物体が共通な何かである」と訳す場合は原文のコンマの削除が必要であろう。もともとコンマはなかったから許容範囲であるが) がある。

Met.A9 後半のテキスト註 02

「タウタース」という代名詞自体は女性複数で、その場合、直接に指すものが見当たらないが、中性複数になる「希薄さと濃密さ」を指しながら、女性複数の「ディアポラース」に同化したと解した（なお、直後に、中性複数の代名詞である「タウタ」が来ており、もし女性に同化していなかったなら、「タウタ」が二回現れることになって、どちらかが脱落した可能性が高い。だから、女性複数の「ディアポラース」に同化してむしろよかったであろう）。

文献

- Alexander Aphrodisiensis, 1891, *In Aristotelis Metaphysica Commentaria*. ed. M. Haydack. (*Commentaria in Aristotelem Graeca*, Vol. I), Berlin.
- Apostle, H.G., tr., 1966, *Aristotle's Metaphysics. Translated with Commentary and Glossary*. Bloomington and London.
- Asclepius, 1888, *In Aristotelis Metaphysicorum Libros A - Z Commentaria*. ed. M.Haydack. (*Com. in Ar. Gr.*, Vol.VI-2), Berlin.
- Bonitz, H., 1848-49/1992, *Commentarius in Aristotelis Metaphysicam*. 2 Vol. Bonn. (Reprint: Olms Verlag, Hildesheim/Zürich/New York)
- Bonitz, H., 1870, *Index Aristotelicus (Aristotelis Opera Omnia, Bd. 5)*. Berlin.
- Bonitz, H., 1890, *Aristoteles Metaphysik. Aus dem Nachlass herausgegeben von Eduard Wellmann*. Berlin.
- Cherniss, H., 1944, *Aristotle's Criticism of Plato and the Academy*. New York.
- Cooper, J. M., 2012, Conclusion - and Retrospect (*Metaphysics A 10*). In: Steel, 2012. 335-364.
- Crubellier, M., 2012, The Doctrine of Forms under Critique - Part II (*Metaphysics A 9*, 991b9-993a10). In: Steel, 2012. 297-334.
- Denniston, J. D., 1934, *The Greek Particles*. 2nd ed. Oxford.
- Frede, D., 2012, The Doctrine of Forms under Critique - Part I (*Metaphysics A 9*, 991a33-991b9). In: Steel, 2012. 265-296.
- Gohlke, P., tr., 1951, *Aristoteles Metaphysik*. Paderborn.
- Gonzales-Varela, J. E., 2018, The Razor Argument of *Metaphysics A.9*, *Phronesis*, vol. 63, 408-448.
- 出隆 訳〔全訳〕, 1959年, 『アリストテレス「形而上学」』, (上)(下)全二冊, 岩波文庫。
- 岩崎勉 訳〔全訳〕, 1994年(単行本初版は昭和17年), 『アリストテレス「形而上学」』, 講談社学術文庫。
- Jaeger, W., ed. 1957, *Aristotelis Metaphysica*. (Oxford Classical Texts) Oxford.
- Kotwick, M. E., 2016, *Alexander of Aphrodisias and the Text of Aristotle's Metaphysics*. California.
- Kotwick, M. E., 2021, Aristotle, *Metaphysics A 10*, 993A13-15: A New Reading and its Implication for the Unity of Book Alpha. *The Classical Quarterly*, 71, 183-188.
- Lawson-Tancred, H., tr., 1999, *Aristotle Metaphysics. Translated with an Introduction*. (Penguin Classics). London.
- M'Mahon, J. H., tr., 1857, *The Metaphysics of Aristotle, Literally Translated from the Greek, with Notes, Analysis, Questions, and Index*. London.
- Menn, S., 2012, Critique of Earlier Philosophers on the Good and the Causes (*Metaphysics A 7-A 8 989a18*). In: Steel, 2012. 201-224.
- Pradeau, J.-F., tr., 2019, *Aristote Métaphysique Livre Alpha: Introduction, Traduction et Notes*. Paris.
- Primavesi, O., 2012a, Aristotle *Metaphysics A: A New Critical Edition with Introduction*. In: Steel, 2012. 385-516. [底本]
- Primavesi, O., 2012b, Second thought on some Presocratic (*Metaphysics A 8 989a18-990a32*). In: Steel, 2012. 225-263.
- Reale, G., tr., 1968 (分冊本初版)/2004 (合本新版), *Introduzione, Traduzione e Commentario della "Metafisica" di Aristotele*. Milano. [2004年の合本新版を用いる]
- Reeve, C.D.C., tr., 2016, *Aristotle Metaphysics. Translated with Introduction and Notes*. Indiana.
- Rolfes, E., tr., 1904, *Aristoteles' Metaphysik. Übersetzt und mit einer Einleitung und erklärungen versehen*. 2 Bde., (PhB, 2&3), Leipzig.
- Ross, W. D., ed., 1924, *Aristotle's Metaphysics: A Revised Text With Introduction and Commentary*. 2 vols., Oxford.
- Ross, W. D., tr. 1928, *Metaphysica*. 2nd ed. (*The Works of Aristotle*, Vol. VIII), Oxford.
- Schwarz, F. F., tr., 1970, *Aristoteles Metaphysik: Schriften zur Ersten Philosophie* (Reclam), Stuttgart.
- Smyth, H. W., 1918/1956, *Greek Grammar*. Harvard.
- Steel C., ed., 2012, *Aristotle's Metaphysics Alpha. With a new critical edition of the Greek Text by Oliver Primavesi*. Oxford.
- Syrianus, 1902, *In Aristotelis Metaphysica Commentaria*. ed. G. Kroll. (*Com. in Ar. Gr.*, Vol. VI-1), Berlin.

田中美知太郎・藤澤令夫 編, 1974-78年, 『プラトン全集』全15巻・別巻1, 岩波書店, 東京。

Thomas Aquinas, 1950, *In duodecem Libros Metaphysicorum Aristotelis Expositio*. ed. Cathala, M. R. et R. M. Spiazzi, Roma.

Tredennick, H., tr. 1933, *Aristotle Metaphysics: Books I-IX*. (Loeb Classical Library). Cambridge and London.

Tricot, J., tr. 1986, *Aristote La Métaphysique. Nouvelle Édition Entièrement Refondue, avec Commentaire*. 2 vols. Paris.

内山勝利 編, 1996-1998年, 『ソクラテス以前哲学者断片集』全5分冊・別巻1, 岩波書店。

内山勝利・神崎繁・中畑正志 編, 2013年—(刊行中), 『アリストテレス全集』全20巻・別巻1, 岩波書店。[「新・アリストテレス全集」と呼ぶ]

- ・本訳と注解は、平成30年度～令和5年度科学研究費基盤研究(C)(一般)課題番号18K00022 研究課題名「哲学の勧め及び哲学の歴史と歴史の哲学に関するアリストテレスの第一哲学構想の研究」の研究成果の一部である。